

プリンセスコネクト！
Re:Dive

龍姫★サキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、そのゲームから一切抜け出せなくなつた：

そのゲーム内で出会う人々：

その人々は現実と仮想の二つの世界の内の『現実』と言う記憶を改竄され

『元からここで生きていた』と言う記憶である『現実』を『仮想』の世界感に

合わせ全ての人の記憶が塗り替えられた：

その後、ゲーム内での生活をしていく内に『自分達がナニをされたかと言う』真実を知る。…もその元凶と呼ばれるある一人は自らの所属するギルド仲間直接洗脳し、真実を知った者に牙を向かせた：

そのギルド：『七帝王円卓（ラウンズ）』を打ち破り、元凶である七帝王円卓メンバーの一人：『霸道』をモットーとする『覇瞳皇帝（カイザーインサイト）』の元に辿り着く

覇瞳皇帝は所属ギルドメンバーが倒れたとしても一切見向きもせずただひたすらに目的を為そうとする。

：覇瞳皇帝は一人になったとしても『自らが望む世界の神になる為』なら何を伴わずとも

—ましてや、窮地に陥っても刃を振るい続けた…
そして—

ユウキは傷だらけになったとしても世界を守る為ならばと覇瞳皇帝に攻撃をし続けた…

—やつとの事で覇瞳皇帝は倒れ、野望を阻止出来た…
と思つたのも束の間…

覇瞳皇帝は、先程の戦いなんて—まるで何も無かったかの様に立ち上がり、先程とは比べ物にならない力を此方に見せつけ始めた…

—これも予想が出来なかったが故に次々と倒れていく仲間達…

覇瞳皇帝は止めと言わんばかりに自らの取つて置きを此方に向けて放つ――

『もう駄目だ……』そう思い、責めて近くに居る仲間を庇つてでも救おうと身を挺するユウキ――

しかし、其処に現れたのは一人の青年。

圧倒的力を見せつけ、覇瞳皇帝を退けるも一歩及ばず覇瞳皇帝の……

『世界の再構築』が行われた――

ユウキは、再構築された世界で記憶を失う。

しかし、前の世界と同様に次々とあつていく色々な個性豊かな女の子達……

ユウキはその物語でどう紡ぐのか――

そしてアメスは言う。

『突如として現れた青年……いえ、その奴が所属するギルドはイレギュラーな存在の様ね……アンタもこれに関しては覚えていた方が得策よ……。あのギルドメンバー全員は……アイツ……が望む事や、アタシが望む終わり方が気に食わないらしい………新たな終わり方……をさせようと企んでいるらしいから気を付けなさい……』

――と。

この世界の真相を既に知っている存在が加わる新たな物語――

—それは君すらも知らない新たな物語である—

目次

【断章】	出演キャラ紹介	1
断章	1節 無謀なる戦いの始まり	
28		
2節	終幕 記憶を無くした少年と魔竜	
の少女達		
		63

【断章】 出演キャラ紹介

世界を掛けて戦い、破れ、記憶を失った、ヒロイン達注目目の騎士

名前: ユウキ

種族: ヒューマン

所属ギルド: (仮) 美食殿 (びしょくでん)

紹介

「僕が何かの役に立つかわからないけど…君達の役に精一杯立たせて貰うよ？困っても、困ってなくても、記憶を無くした僕からはどれも新鮮なんだ。だから、この世界の事とか教えてくれると助かる」

.....

.....

初登場セリフ

「全く…仕方無いですね…ワタシがいなきや、ダメダメなんじゃないですかあ☆」

道端で倒れていた常に腹ペコ王女様？

名前：ペコリーヌ（偽名）

.....

★自己紹介

「はぁ〜い♪何時もお腹ペコペコの☒ペコリーヌ☒ちゃんですよお☆貴方にはお世話になると思うので、ワタシからお礼として貴方に精一杯尽くしますから、これからよろしくお願ひしますね♪」

.....

本名：現時点で不明

種族：ヒューマン

所属ギルド：美食殿（びしょくでん）【ギルドマスター】

好きな物。 食べる事

嫌いな物。 皆が悲しむ事

専用UB (ユニオンバースト)

【プリンセスストライク】

★発動セリフ1

「細切りですよっ☆…ッ！プリンセス、ストライクッ!!」

★発動セリフ2

「全力☆全開っ♪…フッ！プリンセス、ストライクッ!!」

☆掛け合いセリフ (美食殿・冥獄界のみ)

「見ててっ☆見ててっ♪…プリンセス、ストライクッ!!」

紹介

「オイッス☆ユウキ君、コッコロちゃん、キャルちゃん♪奇遇ですね♪これはもう運命ですよ♪ヤバイですね☆♪…んく?…おやおや?…ユウキ君がまた新しい女の子さんを連れて来たんですか? ワタシしよんぼりしちやいますよお…はあ…。…え? 助けてもらったから奢る約束をしてた?…もう…驚かさないで下さいよ♪びっくりしちやったじゃないですか? 責任取って下さい。なのでワタシも奢って貰いましょう! そうしましょう!!…ホラァ♪行きましようよ! 実は、今、丁度良くお腹が空いていた

んで、ワタシ得しましたよお♪でも、今度からは、ワタシが奢りますからあ♪だって
…パートナー何ですしっ♪よしっ！…とそれじゃあ、いきましょ♪」

.....

.....

初登場セリフ

「私はアメス様のお導きのままに、貴方様を一生の最後まで全力でサポートさせて頂きます」

主人の為だけを想い、主人の為だけに全てを捧げる使いの鑑

名前、コッコロ

.....

★自己紹介

「貴方様とはお初にお目にかかると思います。なので私から自己紹介をさせて頂きます。私は~~コ~~コツコロ~~コ~~と申します。主様…もとい、ユウキ様の行く未全てを全力でサポートさせて頂く次第でございます。これからよろしくお願いします。主様♪」

種族・エルフ

所属ギルド・美食殿（びしょくでん）

好きな物・主様

嫌いな物・主様を傷付ける輩

専用UB（ユニオンバースト）

【オーロラ・ビュートニング】

★発動セリフ1

「…行きます。皆に癒しの加護を…オーロラビュートニング」

★発動セリフ2

「癒します。皆に勝利を…オーロラ・ビュートニング」

★掛け合いセリフ（美食殿・冥獄界）

「お護りします。皆に癒しを…オーロラ・ビュートニング」

紹介

「こんにちは。主様。おや…？主様…今回もでしょうか？新しい女の子を口説いて連れて来たんですね…？全く仕方が無いですね…主様は。また、私の知らない間に…はあ…。…主様。我ながら大変申し訳ないお願いをさせて頂きますが…黙ってご清聴願います。…えくコホン。主様の行動を制限するつもりはありませんがただ一つ…私の見ぬ間に女の子を連れ歩くのを控えてもらえないでしょうか…？私はどうも、それを見る度に私の本調子がどうもおかしくなるようなので…。えくと、いや、無理にとは仰いませんが出来れば私が見ている間は連れて歩かないで欲しいですね。あ、はい。実を言うとまだ私は仕事中の身なので、ゆつくりと話す事が出来ません…。それでは私、急ぎの用事があります故失礼させて頂きます」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

初登場セリフ

「あんたと一緒なのは都合は良いけど、アタシまで巻き込まれるのはご勘弁願いたいわ

…意外と…楽しいけど、ね。」

道端で倒れていた獣人、ツンデレ魔導士

名前、キヤル

・・・・・・・・・・・・・・・・

★自己紹介

「あんたはユウキね？…え？『何で僕の名前を知っているか？』…だつて？ふふん。まあ、アタシは前からあんたの事かnーつとと、知っていたのよ。別にいいでしょ？…勝手にやっている事だし、そんな事あんたに関係ないんだから…。…ふあん？…す、き…？…すとー、きんぐうつ!?ち、ちちち、違うわよつ!あ、アタシは、ベベベ、別にあんたの事…つ!あんた、なんて…!!…はあ、はあ、すう…ふう…そ…それ…それよりい…い、何時までアタシの事を、ふ、ふあ、ファンとか、こ、恋人と呼んでいるの…?いい?アタシには☒キヤル☒つて言う名前がちゃんとするの…ふう…今度からそう呼びなさい…!い、いいわねつ!…あんたの、あんたのせいで…非常に…疲れたわ…少し休ませて、貰うわね…じゃ、またね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

種族・獣人（猫人）

所属ギルド・美食殿（びしょくでん）

好きな物・猫と戯れる事

嫌いな物・予想外な事が起きる事

専用UB（ユニオンバースト）

【グリムバースト】

発動セリフ1

「あんたはここままでよっ！グリムバーストっ!!」

発動セリフ2

「アタシに任せなさいっ！グリムバーストっ!!」

掛け合いセリフ（美食殿・冥獄界）

「見ていなさいっ！グリムバーストっ!!」

「さつきはありがとね？…別に感謝とかしてないしっ！ユウキが勝手に助けたお陰で色々ところちは困っているんだってっ!!…何だかギルド活動も意外と楽しいし…どうしよう…。陛下にどう報告すればいいんだろう…はあ…。へえっ!?べ、別に何でもなしっ！…ホラッ!!とつととあつち行けっ!!」

.....

.....

初登場セリフ

「ボクに目を付けて雇うなんて、君は本当に物好きなんだね？まあ、報酬に応じる位に働かせて貰うよ」

魔竜の血を引く冷淡男的ボクっ娘半竜半人（本作オリジナル）

名前： ヒヨウガ

武器種： 魔刀

【ヤマトフリード】

【物理】【防御・無敵貫通】【攻撃時出血付与】

【前衛】

.....

★自己紹介

専用UB（ユニオンバースト）

【スーパーノヴァ】

発動セリフ1

「手加減は無いと思え…爆ぜ散れっ！スーパーノヴァッ！」

SUB（スーパーユニオンバースト） UB二段階目

【ハイパーノヴァ】

発動セリフ2

「消し炭と化し灰となり吹き飛ばえ！ハイパーノヴァッ！」

UUB（ウルトラユニオンバースト） UB三段階目

【ハイパーミッシィング】

発動セリフ3

「君の夢は潰えるのさ…永遠に。ハイパーミッシィング！」

「こんにちは。初めまして…じゃないよね？…つと、申し訳ない。つい、うつかりしていたよ。で、君はユウキ君…で、会っているかな？えつと…ついでに、其処に居る彼女達は…エルフのコッコロ君にエカ…えと…ペコリーヌ君。それに、獣人のキヤル君だよね？…うん。あつてて良かったよ。…ボクつてね、人の顔とかは憶えられるんだけど、名前までは記憶できなくてね。もしかしたら、また忘れるだろうからその時は、君が教

えてくれるとボク的には非常に助かるよ。じゃあ今回はこれで、また会える事を期待しているから」

.....

.....

初登場セリフ

「お兄ちゃんとこれからずっと一緒なんだあ〜♪ええへっ☆嬉しいなあ〜♪」

魔竜の血を引き誰に対しても明るい元気っ娘（本作オリジナル）

名前： トウカ

武器種： 魔弓

【ティアマト】

【物理（魔法）】【攻撃時呪いの炎付与】

【後衛】

.....

★自己紹介

「こんにちは♪初めましてっ♪ユウキお兄ちゃん♪私の名前はねえく☒トウカ☒っつて言うんだあ〜♪可愛い名前でしょお〜☆フフン。え〜とね？私は、あるギルドに所属していてねえ…多分、こことは違うけど目的が同じギルドとちよつと対立しててね…。まだ、ちよつと貴方に付き合う事が難しいけどお、時間が空いたらそつちに顔を出しに行きますので、よろしくお願いね？お兄ちゃん♪」

種族：半竜半人（魔竜：ニライカナイ）

所属ギルド：冥獄界（ヘルヘイム）

好きな物：アイスクリーム

嫌いな物：野菜類

専用UB（ユニオンバースト）

【ダンスング・デス・クリムゾン】

発動セリフ

「後悔しても遅いよ！ダンスング・デス・クリムゾン！」

SUB（スーパージユニオンバースト）二段階目

【ブラッティ・キル・ソーン】

発動セリフ2

「血濡れに切り刻む！ブラッティ・キル・ソーン!!」

UUB（ウルトラユニオンバースト） 三段階目

【アビス・ウル・ヘルヘイム】

発動セリフ3

「終焉の裁きを与えるよ！アビス・ウル・ヘルヘイム!!」

★紹介

「やつほく♪今日も元気かな？お兄ちゃんは。私の事は、勿論覚えてるよね？ウンウン♪そうそう！そうだよね♪流石、お兄ちゃん!!覚えていてくれていたんだっ♪良かったあく♪…この世界でもこんな感じで友達になれるなんてね…嬉しいなあく♪…え？まだ何も喋っていない？いいじゃん！以心伝心ってことだし♪それじゃ、次からは試験的に私の名前を訊くから宜しくね？そろそろ帰らないと行けないからお兄ちゃん！また今度一緒に話そうね♪バイバイ♪」

.....

.....

初登場セリフ

「私を仲間に入れてくれる人は初めてです。相当なお人好しか馬鹿ですね……？まあ、それも貴方の良い所ですが……」

魔竜の血を持ち常に素直で冷静沈着の毒舌娘（本作オリジナル）

名前・ キョウカ

.....

武器種：凶剣&魔導書

【カオス・キヤリバー】 & 【ジャバヴオツグ】

【物理・魔法両立】

【凶剣で攻撃時物防大低下&物攻大低下付与】

【魔導書で攻撃時魔防超低下&魔攻大低下付与】

【相手付与効果無効】【相手強化状態無効】

【中衛】

.....

★自己紹介

「挨拶。紹介。初めまして、ユウキ様。私は☒キョウカ☒と申します。騎士様、貴方様の事は存じております。記憶を無くされておられるのでしよう？安心。大丈夫です。私が必ず、貴方様の記憶を取り戻して差し上げます。質問。貴方は他にも女の子がおられるのですか？…呆然。本当に貴方って人は好かれやすいですね？…特に女の子に。決意。分かりました。私は貴方の記憶の残る様に精一杯頑張りますね？…では。また会いましょう」

種族：半竜半人（魔竜：ディアヴォロス）

所属ギルド：冥獄界（ヘルヘイム）

好きな物：シャーベットアイス

嫌いな物：魚介類

専用UB（ユニオンバースト）

【エンドオブカオス】

発動セリフ

「混沌と破滅を平等に…。エンドオブカオス…ッ！」

SUB (スーパーユニオンバースト) 二段階目

【ワールドエンド】

発動セリフ2

「この世界に終末と終焉を…。…ワールドエンド…」

UUB (ウルトラユニオンバースト) 三段階目

【ラグナロク】

発動セリフ3

「神々が引き起こす災厄と絶望を…。…ラグナロク…」

EXUB (エクストリームユニオンバースト)

【エクスカリバー・モリガン】

発動セリフ特殊

「我が剣の鑄にしてくれる…:エクス…:カリバァーっ!!」

EXIUB (エクストリームツウユニオンバースト)

【カオス・キングダムクイーン】

発動セリフ特殊2

「私の居る場所も全て女王の物…:ヴォーパル…:ストライク!」

★紹介

「挨拶。質問。こんにちは。覚えていますか？私の事を。……。否定。正解。……それで
 すね。アクセントは間違っています。名前が合っています。応対。ユウキ様は今、何を
 しておいでで……。感謝。有難う御座います。……呆然。ただただ、街を歩いていただけ
 で特に何もしていませんでしたか……。ユウキ様らしいですね？まあ、そこは誇るべきだ
 と思いますよ。ある意味。提案。指摘。貴方も用があるのなら次から名前を呼んでか
 ら私を呼び止めて下さい。失念。心配。……ただ、貴方も大変でしょうし、さつきからフ
 ラフラ歩いていて目も見えていられないです。指示。実行。……なので、貴方には用は無く
 とも次からは私自ら話しかけますので無視しないで下さいね？……期待。絶対に守って
 下さい。約束ですよ？」

.....

.....

初登場セリフ

「私と誰が似ている……ですか？……ああ……おに——……いや、ヒョウカお姉ちゃんかあ……まあ

『姉妹の顔はよく萌える』って言いますし…えっ? 『萌える』…じゃなくて『似る』じゃないか? って?…フツッ♪ 貴方も私のおにいーお姉ちゃんによく似てますね♪』

誰に対しても優しいドジッ娘で周りを魅了する双子の妹

名前：ヒヨウカ

.....

武器種：魔剣

【ヘルヘイム】

【絶対必中】 【防御無視】 【攻撃時毒付与】

【常時相手に毒付与し続けるフィールドを形成する】

【毒状態：猛毒状態の相手が受けたその毒を一段階上げる】

★自己紹介

「私と会うのは初めてだよね?…え? 会った事あるんじゃないかって? いえいえ、初対面ですとも。少なくともこの世界では。…ん? えと…ちよつと、待つて…? あった事あるって…もしかしなくても、お兄ちゃんの事じゃ…まあ、私と似ているし…仕方ないかあ…ああ…ゴメンね? 私、初めてなんだよ? 貴方と会うの。で、あつたって人は多分

私のおにいいーとと：お姉ちゃんだから。分かりずらかったかな？後でお姉ちゃんにも言うよ。じゃ、今度から宜しくね？」

種族・半竜半人（魔竜：ヘルヘイム）

所属ギルド・冥獄界（ヘルヘイム）

好きな物・ソフトクリーム

嫌いな物・掃除

専用UB（ユニオンバースト）

【スーパードヴァ・雪華】

発動セリフ

「私の力はお兄ちゃんに劣りません！スーパードヴァ！」

SUB（スーパードヴァ）

【ハイパードヴァ・氷華】

「永遠なる青い炎に焼かれて下さい！ハイパードヴァ！」

UB（ウルトラユニオンバースト）

【ハイパーミッシング・極碎氷華】

「私の200%の本気…見せます！ハイパーミッシング！」

★紹介

「こんにちはっ！ユウキ君。元気だった？私達のギルド、ヘルヘイムの皆も元気だったよ。君の所属しているギルド…びしょくう…でん？…だっけ。ギルドマスターはあのエカあ…は言っちゃダメなんだったあ…ペコリーヌちゃんだったよね？いい子だよねえ…あの子。優しいし、悪は許さないし、何より食の事なら何でも来いって感じだし…一人くらいギルドに欲しいかなあ…あんな子が…。みたいな感じで私だけ話しかくっちゃったけど大丈夫だったかな？…君といると、お兄ちゃんによく似ているせい一杯話しちゃうんだよね…双子の中のお姉ちゃん何だけど。…君といえる時だけ貴方の妹に…なっちゃおうかなあ…えへっ♪なあ〜んてねっ☆…でも、嘘じゃないから、本気でそんなこと思うことあるし今度からそうしてみるよ。『貴方だけの…妹』なんだからね？」

.....

.....

初登場セリフ

「騎士君の為なら…私も一緒に…」

騎士に想いを寄せる一途な回復魔導士

名前：ユイ

.....

武器種：片手杖

【フラワーロッド】

【魔法】

【後衛】

.....

★自己紹介

「こんにちは。初めまして：でいいよね：？だって、君の記憶がないんだもん：。：えーと？自己紹介だよね？ユイです。君の事は前から知っていたんだけど、忘れちゃったなら仕方ないよね：私はね、貴方が忘れちゃってもずっと貴方の味方だから、何か困った事があつたら気軽に私に声を掛けてね？私も、出来るだけ貴方の期待に応えてみせるからね？」

種族：ヒューマン

所属ギルド・ トライトウインクル

好きな物・ 家事

嫌いな物・ 虫

苦手な物・ 恋愛

★紹介

「こんにちは、騎士君。暫くだね。元気だった？…うん。私の方はヒヨリちゃんやレイちゃんと一緒にクエストや困っている人を助けたりと忙しかったよ。でも、とても充実した日々だったよ。お陰様でこれでも元気に過ごしたつもりだよ？…そっちは？…ふうん。私がいけない間に色々な人と出会って色々なことを学んだんだね？…出来れば私も一緒に教えたかったなあ…え？いやいや、大丈夫だから。こっちの方は心配しないで。私はまだ、用事があるから話せないけど、今日中に何とか終わらせてまた話に来るから。じゃ…またね、騎士君♪」

.....

.....

初登場セリフ

「君と会う事は、…やはり初めてじゃない気がするな…？何処かであったかな？…何方にせよ、私は君の力になるから遠慮しないで欲しいな」

剣の腕は随一自己流日々鍛錬を重ねる事を怠らない魔族少女

名前：レイ

.....

★自己紹介

「私の名前はレイ。ヒヨリとユイから話は聞いている。君が噂の騎士であるユウキか。…うん。君はやはり悪い奴じゃないよ。たまにおかしな行動をするらしいがその時は私が全力で止めてその後、理由を訊くでしょう。なあに心配はいらない。何故なら君のおかしな行動もユイとヒヨリから事情は聴いているから、何故その様な行動をしたのかを訊けば正直に答えてくれると信じているからだ。私も出来る限りサポートする。だから、君はそのまま真つ直ぐに進んでいくんだ」

種族：魔族

所属ギルド：トライトインクル

好きな物：自分自身の鍛錬

嫌いな物：身分を理由に人の自由を奪う事

★紹介

「やあ、奇遇だね。君もこれから何処かへ向かう所か？…私か？私は、単に興味である魚釣りをしに行く所だが…君も一緒に来るか？…そうか、今は忙しいか…。なら、私から魚釣りに君を誘いに向かうがいいか？…そうか。わかった。では、四日後の今の時間帯に君の住む所を訪ねるから覚えていて欲しいな。君もこの機会に魚釣りに興味を持つてくれれば嬉しいな。では、またね」

.....

.....

初登場セリフ

「アタシも君の力になるよ！だから、困った時はまずアタシに声を掛けてくれると嬉しいなあ〜♪…なんてねっ！」

困った人は見過ごさずお互いを『助け助け合う精神』の元氣ツ娘

名前：ヒヨリ

・・・・・・・・・・・・・・・・

★自己紹介

「こんにちはっ！ユウキさんっ♪アタシはユイが所属しているギルドのメンバー一人。名前はヒヨリです！宜しくねっ♪：所でユウキさんは困っている事ってあったりしないかなあ？あ、ううん。別に何かある訳じゃないから、今すぐとはいかないし、：と言うより起こそうと思つて起きる事じゃないから。特に困っている事に関しては。えくと：？あ、じゃあさ、じゃあさ、次に君が困っている事が有れば『是非』相談して欲しいな。アタシが君の力になる様に精一杯頑張るから。え？『何でそんなに頑張るのか？』えへへ：だつて、アタシは『助け、助け合う事が一番の生き甲斐』だし、アタシの性格上『困っている人』を見ていられ無いから、それに助けた人にお礼を言われるとアタシはスッキリ感が合つて凄く嬉しいし楽しんだよ。だからさ、困つて居たら一足先に教えて欲しいよ。アタシのモットーは『助け合い精神、皆お互い様々』だからねっ♪という事でこれから宜しくお願ひしますっ♪」

種族：獣人

所属ギルド：トライトインクル

好きな物：人を助ける事

嫌いな物：人を困らせる事

★紹介

「おつはよお〜♪ユウキさん。今日も一人でお散歩？ん？違う？『アタシに相談』？もしかして、もしかして…困っているの？…うん。…うんうん。なるほどね。『ユウキさんの持っていた財布が何時の間にか消えていて探したけど見つからず途方に暮れていた所、丁度良くアタシが歩いているのを発見して迷わず相談しに来た』…と。…うん。ユウキさんの困り事はアタシが引き受けた！アタシも一緒に探すの手伝うから、落とした場所とか教えてよ。大丈夫だから、アタシは困っている人は放つてなんか出来ない性分だから、絶対に見つけてあげるからね！—よ—しっ！ヒヨリ！いつきま—すっ!!!」

断章 1節 無謀なる戦いの始まり

1節 無謀なる戦いの始まり

ある場所での世界最後の戦いが幕を開けようとしていた……

* 「貴方達は本当に面倒だわ……この時間軸でさえ私の物にあと一步と言う所だというのに……もう少しで手に入れられるというのに……貴方達と言う邪魔過ぎる連中のせいでも……また失敗させる気……？フフフ……。でも、今度はそうはいかないわ……もう私の邪魔は出来ない。絶対に止められない……。私の野望を止める事は誰にも出来ない。前の様はいかない様に……貴方達を、ここで、この場所で、この観客席とも言えるこの場所で、貴方達皆を平伏した後、この寂れたこの世界を終末させ、私の新たな世界を……いえ、私だけの望む新たな世界を再構築して今度こそ……今度こそ、祈願が達成が出来るのよ!! さつさと虫けらは虫けららしく地面に平伏して潰れなさい!!」

獣人なる女性は禍々しいオーラを纏いつつ敵対している青年一人と女の子三人に余裕の表情で目を瞑った。

* 「く……覇瞳皇帝（カイザーインサイト）……っ！まだこんな力が残っていたとは……」
青年は苦しみながらも目の前に怨敵が居るように、声を張り上げる。

*「でも、諦める訳にはいかないっ！この世界の…皆の願いが込められているんだ…っ！ここで終わらせる訳にはいかないっ！！」

その言葉に反応した青髪長髪の魔族の女の子は、激励の言葉を兼ねて励ます。

*「そうだよっ！レイさんっ！ユウキ君も、ユイちゃんもっ！！希望を持つとうっ！！私達なら勝てるっ！！」

と黄色い髪の獣人の娘がその魔族の娘の言う事に同情する。

ユイ「そうだね。ヒヨリちゃん。ここで諦めてしまったら、ここまで来た意味が無いよ。無理かもしれないけど…せめて足掻こう…っ！」

それに続く様に、ユイと呼ばれたピンクの髪の女の子は険しそうに皆を激励した。

覇瞳皇帝「鬱陶しいわ…さつきから、『希望』だの。『足掻こう』だの…飾り台詞は好きじゃないわ…。そんなに散りたいなら…もう終わりにしましょう。…責めての償いに、貴方達の足掻きでも何でも好きに受けてあげるわ。無謀な足掻きをこの私に見せて、絶望しながら逝きなさい…。この舞台の主役外の虫けらは排除しなきゃね…！」

覇瞳皇帝はさつきからの皆の励ましに耳障り目障りな様で、かなり不機嫌になりつつも余裕の態度で迎え撃つ…その表情はもう時既に勝っていると思える程の余裕っぷりだった。

.....

覇瞳皇帝Lv99

HP200000

.....

覇瞳皇帝「フフツ…」

覇瞳皇帝はチャージをしている…

ヒヨリ「準備OKっ!!」

ヒヨリはUBを何時でも出せるようだ…

レイ「此方も大丈夫だ！」

続くレイもUBを発動できるらしい…

ユイ「私も何時でも行けるよ！」

ユイもUBが発動可能らしい…

ユウキ「よしっ！ヒヨリ。頼むっ!!」

ヒヨリ「任せてっ!!」
 ☒私は諦めないっ!!
 みんなの為にっ!!
 ヒヨリラーツシュッ!!…

ハアアっ!!
 いっつけええっ!!
 !!」

覇瞳皇帝「フフツ…」

☒残：HP198555☒

攻撃を受けても余裕な様で薄気味悪い笑い方をする覇瞳皇帝。

ヒヨリもこれは効いていないと思っただらしくレイに思いを託す…。

ヒヨリ「レイさん！後、お願いっ!!」

レイ「ああ、任せるんだ！」

ユウキ「レイ、後に続けっ!!」

レイ「了解！私の本気を…！この剣筋に全てを注ぐっ!!星連斬・零雨（スターラツ

シュ・レイン）!!—せいやあっ!!」

覇瞳皇帝「フフツ…」

残・HP195216

レイ「何っ!？」

ヒヨリ「そんな…レイさんの渾身の一撃な筈なのに…」

自身の攻撃が全く聞いていない覇瞳皇帝を前に驚きを隠せないレイとヒヨリだった。

覇瞳皇帝は明らかに期待外れな顔をして相手を見下す…。

覇瞳皇帝「あらあ…？もう終わりかしら…？…ふくん。諦めが早いと言うのはね…？

それとも何かしら…？あれが、一番の、『渾身の一撃』だなんて言うのかしら…？…フ

ツツ…随分と可愛い一撃じゃない…。」

と見下した言葉と挑発で相手の冷静さを失わせようと言葉巧みに火を付けようとした。

その挑発を真面に受ける二人は、覇瞳皇帝の言葉に怒り狂いヒヨリとレイは興奮気味に覇瞳皇帝に食って掛かった

ヒヨリ「…っ!? な、何をおおつ!?」

レイ「…っ?!…聞き捨てならないな…その言葉は…。癩に障ったぞっ!」

覇瞳皇帝「ああ…興奮めだわ…せっかく本当の事言つてあげたのにね…」

—カンツ!!ギンツ!!

覇瞳皇帝「—人が話しているんだから、静かに聞いていなさい。…全く、そんなに話を聞かずにひたすら血眼になって武器を振り回す虫けら共には制裁が必要なようね…っ!!—フンツ!!」

覇瞳皇帝は話しながらも敵の猛攻を軽くあしらいながら猛攻を掛けるレイとヒヨリに牙を向ける—

—ガキンツ!!—ゴスウツ!!

レイ「くっ?!うぐぐ…ぐうっ?!—ぐわあっ?!」

レイの斬撃を躲しその隙を狙い覇瞳皇帝はレイの脇腹に覇瞳皇帝の鞘で思いつき吹き飛ばす…レイは自身の剣で防御するもその圧量には耐えきれずそのまま脇腹にあたってしまう…

ヒヨリ「レイさん!?…このヤロー!!」

ダタタタツ!! タンツ! フオンツ!!

覇瞳皇帝 「拳筋が甘いわね…?」

—ブンツ…カツツ…

覇瞳皇帝 「—ふっ…無駄に—」

—フオン…スアン…

覇瞳皇帝 「…無駄に攻め過ぎない事も重要よ…?—ハアツ!!」

—フオンツ!!—シオンツ!!

拳による連撃をあつさりと躲し反撃に出る覇瞳皇帝だったがその剣を横薙ぎに振つた瞬間—

—ストンツ!

ヒヨリ 「っ!—甘いのは、そっちだよっ!! やあっ!!」

—ヒオンツ!! フオンツ!!

覇瞳皇帝 「—っ?! フフ…—ふうん…。まあ、雑魚虫な癖して少しは頭が回る様ね…? はあ…。ま、所詮はこの程度…—かしらねえ…?」

—ガキンツ!!

ヒヨリ 「な!?!」

ヒヨリは足で攻撃をすると同時に覇瞳皇帝の攻撃も避けるという技を披露する…し

かし—

覇瞳皇帝「—貴女の策は見事な物よ…？称賛してあげるわ…。私に攻撃を当ててみせたんだもの…—でも、残念。私はその手は読んでいるの。御免なさいね…。貴女の手はこう—私に一切、拳撃が当たらなかつた…—のならば、足で攻撃すれば相手は予想外な攻撃は躲しきれないから当たる…その際に隙が出来た所をその目障りな騎士と彼女で止めを刺しに一斉に攻撃しようというのが貴女達の迷惑…—だつたんでしょ？ならばその策を最大評価して、私も策を講じてあげるわ—」

—ガシツ!!

その攻撃は覇瞳皇帝の持つ剣により弾かれた…その後の無防備であるを足狙い覇瞳皇帝の手が飛んでくる—

ヒヨリ「くっ…このお…—このままじゃあ…—っ!!」

ヒヨリは覇瞳皇帝の手を解こうとするもグルグルと振り回せれ手が足に届かない。

覇瞳皇帝「貴女ならどうするかしらあ？この状況を…これじゃ、期待は薄いかしらねえ…？はあ。退屈凌ぎすらならないわあ…。…これで、—終わりよおっ…—はああっ!!」

—グギギギイイ…!!!

覇瞳皇帝は期待もしていたようだがやはりこの状況から奪回してくれそうにない為、

遂にはしびれを切らして思い切り投げ飛ばす…

グルンツ！グルングルングルンツ！…フォンツ！！！！

ヒヨリ「う…うわああっ?!?!」

為す術もなく片足を掴まれ身動きが取れないヒヨリは程なくして地面に叩きつけられた…

—フウウウン…—ドゴーンツ!!

ヒヨリ「うぐうつ?!?いい…つう。くう…ううう…」

…彼女自身はユウキに戦わせたくないとは分かっていたが仲間がただやられる様じゃ黙つても居られなかった。しかし、顔には出ていて『本意だけど本当にゴメン』と言う位の悲しさも出ていた…。

ユイ「ヒヨリちゃんっ!!…騎士君！少しだけ時間を稼いで！その間に私は魔法を使うから!!」

しかしレイだけでなくヒヨリまで倒れたとなれば黙って見ていられるはずもなかった。

—遂にユイはユウキに指示を飛ばしてしまふ。

ユウキ「わかった!!」

ユイから指示を受けたユウキは神の加護を受けた『プリンセスナイトの権能』を使い

ユイを強化しつつ自らは覇瞳皇帝に自ら攻撃を仕掛けに剣を抜き突撃する…

覇瞳皇帝「…無謀ね…貴方みたいなゴミクスは。私に触れる事すらも出来ないのに…よく攻撃するきになれるわよね…称賛に値するわ…フンツ！」

覇瞳皇帝はその攻撃を平然と受け、ユウキの事を見下した上で褒め称える…

—ガキンツ!!ギイギイギイギイ……—

ユウキ「くつ…—それはどうも。お前が言う事は僕も理解出来るさ。無謀って判るくらいには。でも、こうなつた以上は無謀でも何でもいいんだ!僕に出来る事はこの世界に閉じ込められた皆を…ゲーム内から解放させる事位だけなんだ!…だから、元凶のお前を倒すまでは負けるわけにいかないんだ!!お前みたいな自由勝手な奴に世界の主導権を渡す訳にはいかないっ!!」

ユウキは覇瞳皇帝に対し敵意をむきだしにしつつ相手からの褒め言葉を素直に受け取った…

—キインツ!ドンツ!キンツ!!…—フォンツ!!

覇瞳皇帝「…呆れたわ…あんな世界のどおこがいいのかしら?あんな奴等なんて—いいえ…あの世界の何処が楽しいのかしらあ…?ねえ、目障り耳障り無知無謀無策のプリンセスナイト様あっ!!」

覇瞳皇帝はまるであの世界に恨みでもあるかのように感情を露わにしてユウキに畳

みかけた：

カチャ：フォンツ!!カキンツ!

覇瞳皇帝の攻撃に防戦一方だがその攻撃を防御しつつ会話を続けた：

ユウキ「ああ、そうだね。あの世界は楽しくも何ともない平凡でつまらない世界さああつ!!…だけどお：つ!!——」

—キンツ!カンツ!

ユウキ「—だけど、その何ともなく平凡でつまらない世界だからこそ、このゲームがより魅力的になったんだつ!!」

—ガキンツ!!ガキンツ!!

ユウキ「それが分からないだろう!—それこそお前は、ただの犯罪者だつ!!世界を乗っ取り、この世界を自由に弄び、更には仲間にまで洗脳を掛ける：お前は这个世界とあの世界二つにおけるの最悪の大魔王だ!!」

—キンツ!!キ

ンツ!!

覇瞳皇帝「お褒めに預かり光栄だわ：ユウキ様?—でもねえ：だけどねえ：私が一番に最悪の魔王と思って居る奴こそが：ここに居る最低で不快で目障りで、私の計画を常に邪魔をしてくる：そんな勇者っぽいセリフを喋るお前こそが一番魔王らしいの

よおっ!!ふんっ!!!
!!!」

—ガギンッ!!ガツンッ!!ドゴォーン!!!

ユウキ「くう…ぐっ?!?—なあ!?!」

覇瞳皇帝はこの戦いに飽きたのか又は、ふざけた事を貫かす騎士に制裁を加えようとしたのか分からないが、いきなりその攻撃がとても重くなつた…ユウキは耐えられず耐性を崩す…

覇瞳皇帝「何時までも邪魔をし続けるお前には望み通りの結末を与えてあげるわあ…!」
吹っ飛びなさいっ!!覇瞳碎撃(カイザーストーム)!!!」

そこを狙っていたかのようにユウキに向けて直接、自身の技能の覇瞳碎撃をおみまいした。

ドドドドッ!!…ドツゴォーンッ!!!

…カトンツ…コトツ…カタコトコト…

覇瞳皇帝の放った技能はその場所にあつた建物を粉碎し粉々にした…その近く…ユウキは間一髪巻き込まれなかつたが、ギリギリだった様でかなりの傷を負っていた…

ユウキ「くっ?!?うぐっ?!?—ぐう…!」

ユイ「騎士君?!?もう!しょうがないっ!!まだ溜まってないけどダメもとでえっ!!

私は負けないっ!!ガーネットグラウスっ!!!
!!!

ユイは流石に耐えられないとばかりに溜めていた必殺を解き放った：

覇瞳皇帝「諦めない子には絶望を叩き込んであげるわっ！
 ☒覇瞳衝撃波（カイザーインパクト）☒：はああっ!!」

覇瞳皇帝は、ユイに向けて覇瞳衝撃波を100%出力で解き放つ：

—ギウウウ：ギユイイイイ：

互いに放つ高出力の魔法エネルギー波：しかし—

—ギイイイイイ：ギイイイイイインツ!!!

ユイの魔法が一步及ばず、ユイの魔法は覇瞳皇帝の魔法に飲み込まれる：ユイは避ける事が出来ず：

ユイ「ゴメンね。。。はは：やっぱり、負けちゃった：」

キイイン：ドゴオオーン!!!

ユイは直接、覇瞳皇帝の攻撃を食らい、吹っ飛ばされ立てなかつた：しかし覇瞳皇帝はユイに止めと言わないばかりに追撃を：それも最大出力の必殺技で—

覇瞳皇帝「これ以上邪魔が出来ない様に貴女だけ特別に止めを刺してあげるわ：光栄に思いなさい：私を前にしてまだこうして生きていられるのだから：でも、そんなラツキーはここでおしまいよっ!!塵にならなさいっ!!」

ユイ「騎士君：私を置いて逃げてっ!!」

ユウキ「…いや、出来ないよ…僕には…僕には、君を身を挺して守るしかないんだ…っ!!」

ダツ!!ダタタタタツ!!

ユウキは最後の力を振り絞り覇瞳皇帝の超必殺を身を挺して庇おうとユイに向かって走っていく…

覇瞳皇帝「せめて、一撃で…痛み無く殺してあげるわ…！感謝しなさいっ！☒…世界は…全て…自分の物…だからっ！…全てえ、私に跪けえっ！…！はあああああっ!!」

覇瞳皇帝の魔力が収束していく…それは巨大で一本の槍の様になった…それをユイたちに向けて、解き放つ…っ!!

ユウキ「くそおっ！間に合えっ!!」

ユウキが身を挺して全力で庇おうとする…

ゴオオオオオオオオツ!!!

ユイ「ユウキ君っ!!止めてええーっ!!」

レイ「ユウキっ!!無茶だ…っ！やめろっ！今すぐ止めろっ!!」

ヒヨリ「そうだよおっ!!死語の世界（ニライカナイ）に行かないでよっ！お願い！やめてっ!!」

ユイたちはユウキに『止めて』の文字が重なる…しかし、その瞬間！

—タタタタタツ!!!

* 「ユウキっ!! 全員死にたく無かつたら全力で地面に伏せていろオっ!!!」
と何処からか声が聞こえる…ユウキは生き残れるのならと咄嗟に身を挺する前に自身の体を地面へと自ら叩きつけた。

「…っ?!?! (誰だかわからないが、ここは指示に従おう…!) …くっ?!?!」

ドサツ!!!

ユイたちは突然の事で戸惑っていた…

ユイ「だ、誰っ?!?!…でも、ひとまず指示通りに伏せなきゃ…!」

レイ「…援軍か…?…そんな援軍は出した覚えが…いやここは素直に従うのが得策だな…!」

ヒヨリ「何だかよく分からないけど、助けが来たんだし指示に従わなきゃ…!」

そして、すぐに声の主が足音と突風と共に現れる…

タタタタタツ! トンツ!!

—ヒユンツ!! ゴオオオオツ!!

* 「…つべこべ言っていたら皆纏めて消し炭にしてやる所だったが、意外と素直だなあ…?が、それでいいっ!! 俺は素直で馬鹿真面目な奴が一番扱いやすいからな! だからっ!! テメエは黙ってそこで見てろっ!! この俺が指示を下すまでぜってエに動くん

じゃねえぞお!!…さあてエ、みんなお待ちかねしているのでサツサと終わらせるぜエ…っ!…其処の不屈き自称『霸王』さんへご挨拶ウっ!!…殴殺だア…!行くぜエ…ッ!

突然と現れた青年は黒いオーラがまるで刃の周りだけを高速で移動し空気さえも着る様な刀を取り出した後、両腕をクロスにし刀の力と自身の力を合わせるかの如く力を貯め始める…

*「キイククウツ…!スウ…面白れエもん見せてやるウっ!!—」

ジリジリジリジリ…ジジジジイイ…!!

覇瞳皇帝の放った必殺を中心として小さくそれも真つ赤な球体が収束していく…それもすぐに覇瞳皇帝の放った必殺をも飲み込み巨大化していく…それは宇宙上でしか起きないと言われる天文学的現象の一つ超大型惑星の最期の爆発に似ていた…

*「—ハアア…クククツ…!…!—ギヤハハツ!!」

キユウウウイイイン…!!!

そして、限界を迎えた球体が城く光り輝き—

*「—消し飛べえっ!」

ドドドドドドゴオオオンツ!!!

全てを塵に帰する様な熱波と衝撃が辺りを支配した—

*「ハイパーノヴァ!!!」

突如として現れた青年。その姿は僕に似ている様で違い、鎧が黒銀であり頭には兜は無いが竜族であることが分かる角が…下も同じく黒銀の鎧を装備しており背中だけは薄くも頑丈そうな鎧を装備し竜族である翼が生えている。尻尾も生えているが、明らかに竜族だけど、並みの竜族とは思えない角と尻尾と翼が生えていた…

青年のいきなりの必殺は覇瞳皇帝が放った必殺を中心に大きく広がり続け、最終的に大爆発を起こした…その範囲は地面に極限まで平伏して無いと大きな深手を負うくらいの衝撃波だった…それも伏せていない覇瞳皇帝を見ればすぐにわかったくらいだ…

覇瞳皇帝「なああつ?!?—くうううつ?!?な、なに…?!?いきなり—つ?!?もしや—いや、こんな事は…ありえな—つ?!?」

—ゴオオオオツ…オオオオツ!!!

覇瞳皇帝の攻撃は突如現れた男性の必殺により完全に飲み込まれその勢いが覇瞳皇帝に届く…

—ドゴオーオンツ!!!

覇瞳皇帝「—きやあああつ?!?…おのれえ…!?!?この私にここまで傷を負わせる奴は…?!?—?!?…まさか。…くそつ! 私の方をもう少し早く片付いていれよ…」

霸瞳皇帝：残HP。25630

霸瞳皇帝はこの男性の事を知っているような口ぶりだった：その疑問を抱いた事に察したのか、男性は怪しげに答えた：

*「おいオイイ：笑わせんなよオ：誰が『この俺をここに辿り着く前に終わらせるつもりだったんだつてエ：？』：舐められたものだなア：。以前にイ：この場所にくるまでに立ち塞がってきた雑魚達：この俺が100%も出ず位強いと思つて居たかア？—ハハアツ!!残念ながらこの俺に攻撃しても傷一つ負わせは出来ねえよオ：。何故かわかるかア：？—格がチゲエンだよオ：。テムエはこの俺の事オよおく、しつているだろうが：。もしやとは思うが、俺を知つたうえでこんな玩具なんぞを向かわせたアのか：ハア：哀れだなア：一回抱き締めちまいたくなる程哀れだわア。：お前位の実力ならくだい事しなくても：とつとと再構築出来たのにイ：こんな有様じゃあ再構築する以前に頭の知能をどうにかしねえとオ何度でも同じ目に合うだろうなア：ああ：？：アとお、この場に居る奴等にはこの俺を知らねえ奴も居るだろうなア：？：本来なら俺からの説明何ぞ割に合わねエがア：合う奴が最後だろうし、冥土の土産程度には詳しく話してやんよオ：珍しくこの俺がしつかりと説明するんだからア：訊いて覚えてねエ奴は全員ブツ潰すから必ず覚えろ、必ずだア！良いなあっ!!!」

男性は皆に教える様に両手を上に広げながら大仰に説明を始めた：

*「…この俺は『ヒヨウガ』っていう。所属ギルドの詳細は隠匿だが最後だろうし、特別にイ教えてやるウ…暗殺専門ギルド『ヘルヘイム』…そのリーダー格たるもんを俺が務めている。即ち、隠れた最恐ギルドつてえ所だあ」

ヒヨウガ「長く言うと、『隠匿暗殺専門ギルド『ヘルヘイム』』と言う」

ヒヨウガ「ヘルヘイムと言った由来は地獄に住むと言われる冥獄界神の主神ヘルが飼っているという竜だア…。その主が認めた者以外、全てを食らい尽くすと恐れられている死者の国…別名【冥界】に住む竜から来ているらしいぜエ」

………

ヒヨウガ「次にメンバー紹介イ…。最初はこの俺。ギルド長たるリーダーが『ヒヨウガ』だ」

ヒヨウガ「この俺の専門は斬殺。俺の持つ武器は『魔刀』と呼ぶ特別な刀だ。この刀の名前が『ヤマトフリード』と読むぜ。」

ヒヨウガ「俺の持つ武器に宿る特性が俺の得意分野に置ける能力強化…その能力こそが、『相手がどんな物で有れ、触れたその瞬間に貫通し、無敵である物やどんなに特殊な能力を持つ鎧や武器全てをまるで豆腐を切る様に綺麗に切断出来ちまうと言う物オ…」

ヒヨウガ「俺の持ち味は武器だけに依存何ぞしねエ…。俺の必殺も桁違いだ。俺が必

殺を使ったなら、その日のうちに世界は終わりを迎える…。そしてエ、この俺の最終奥義：『ハイパーミッシング』を発動したならそいつの存在は蒸発しちまう…」

・・・・・
次は副長の『ヒョウカ』…

専門は毒殺。

持つ武器は『魔剣』で有り名前は『ジークフリート』だア。

武器の能力が場違いで有り、相手がどんな場所に居ようとも相手には必ず命中し命中すると低確率だが毒をもたらず。

更に武器の能力はそれだけではなく、その毒状態のままを食らうと猛毒となり、体力が減っていくだけでは済まなくなる。

尚、猛毒は毒より1.5倍体力の減りが早い。

猛毒状態中は常時出血毒状態となり全攻撃力超低下する。

出血毒状態中は被ダメージが1.25倍になる。

出血毒は毒系と違い体力が自然回復せず最大HP1%ずつ減っていく様になる。

そのまま、毒を食らうと激毒となる。

激毒は猛毒よりも3倍体力が減っていく。

激毒と出血に加え毒状態中常時麻痺毒状態にもなる。

麻痺毒状態中は全防御力超低下する。

毒回復が無効となり体力回復アイテムで回復が出来なくなる。

武器の能力だけではなく必殺技も強力であり、スーパードヴァ・ハイパードヴァ共に、相手に氷瀑波を与え、全能力超低下する。更に氷耐性と炎耐性を大きく低下させ、次に与えるダメージが3倍になる。尚このデバフは積み重なっていく。

彼女の持つハイパーミッシングは、全てを極氷土と化す大爆発を引き起こす。

この俺が持っている『ハイパーミッシング』とは一味違う俺の様な一撃必殺では無いが仲間以外の相手にその場に居るだけで氷属性ダメージを与え続ける世界を創る。この戦闘が終わるまで続くから敵としたら面倒な相手になるぜ？

・・・・・・・・・・・・・・・・

次に俺の仲間：仕事の支援を終わるまでし続ける『トオカ』・・・

此奴の専門は呪殺と刺殺と焼殺。

持つ武器は『魔弓』で有り名前は『ティアマト』だア。

この武器の能力は『魔刀』と『魔剣』にかなり劣るも、この『魔弓』も場違いな能力を併せ持つ。

彼奴の『魔弓』には矢と言う概念が不要で有り、矢と言う弾は何発でも生み出す事が可能。更に生み出した矢には呪炎と言う呪いの炎が付いている。

この呪いの炎だけは特殊状態異常であり、自然治療でのみしか受け付けない。それも伝説上にしかなかったとされる唯一の状態異常である。

この武器こそが冥界竜・双頭兄弟竜『ティアマト』が原点というはなしだア。

その竜は頭が二つあり兄弟でもあった、が互いに仲が悪く、何時も小さな事で争っていた。しかし、仲が悪くも戦闘となればコンビネーションが凄まじく敵を軽く潰せる程だ。しかし、何方にせよ仲が悪すぎて結果的に共倒れしてしまった。その際に互いに抱く呪念などの思いが形となり形成された武器が『ティアマト』である。この武器でしか呪いの炎が付与できず、弓が認められた者でしか扱う事が出来ないと言われていた。では能力の詳細だア…。

この武器が常に付与される状態異常はその場を圧倒的に凌駕するがある欠点がある。その特徴が

☒命無き物には燃え広がらない☒――つまり生きていなければ火が燃え移らない。もしくは、燃えない。悪く言えばア…意味がないってエ事だア…。

☒水では絶対に消えない☒――詰まる所、自然鎮火つてとこだア…

☒敵に与える攻撃力が0.75倍に減り敵味方から受けるダメージが1.5倍になる☒――つまり、敵に全ダメージが通らなくなるどころか逆に自分以外の敵味方問わず全ての攻撃が自身に被弾する場合は攻撃力が自身に対してだけ1.5倍化する事オ…。

☒効果時間は固定10秒であり増加せず重複しない☒詰まる所、10秒以上にはぜつてえならず、この効果もリセットも出来ねえ…てえ事だア…。

☒この効果を付与時、通常状態時には必ず付与される☒つまりは、呪いの炎になっていないのなら矢のダメージが無くとも、例え相手が無敵でも、状態異常だけは必ず付与されるといふ効果だア…

☒呪炎状態の場合はこの攻撃は防御と無敵を貫通し威力が1.5×1.5倍になる☒詰まる所、呪いの炎状態時は☒重複せず増加しない☒…そのデメリットを補う為の効果つてところだなア…

そしてこの弓はこの俺が彼奴に授けた物で、俺も彼奴もその弓に認められ更には極限まで使いこなせるようになって俺は逆に羨ましいぜエ…

まあ、此奴の奥義と言つて良い必殺は比べ物にならない位異常であり、一定時間自身の放つ矢が呪炎爆破し着弾したその場から呪炎の波が円状に広がる様になるらしい

………
では、最後。確実性と計画性を要にしている『キョウカ』…

専門は俺と真逆の暗殺。

持つ武器は特殊でありかつ、両方を持つている事が特徴…。

武器は『凶剣』と『魔導書』で有り名前がそれぞれ『カオス・キャリバー』と『ジャ

バヴオツグ』と読ぜエ…。

武器は『魔弓』と同じく他に比べると場違いな能力を持つ武器で有る。

この武器種はそれぞれに相手の戦闘力を削ぐ効果が常に付与されているウ…。

まずはア、『凶剣』だぜエ？

此奴はなア…相手にダメージを与えると共に物理系能力値を大幅に低下させる事が可能な能力を持つ事オ…

お次は『魔導書』オ…

此奴は、相手に魔法ダメージを与える共に魔法系能力値を大幅に低下させる事が可能な能力を持つウ…

結わば、自身の武器種によりその武器種がより通りやすくなる為の下準備つて所だなア…

また、『凶剣』と『魔導書』には攻撃性能だけでなく防御性能も有る。

『凶剣』ならば使用時、相手付与効果完全無効を自身に常に付与

『魔導書』ならば使用時、相手の強化状態無効を自身に常に付与

必殺全ては全体に潰滅的な被害をもたらす『エンドオブカオス』や敵位置のみ地形無視全体超圧縮大爆発を起こす『ワールドエンド』。敵位置だけでなく味方すらも巻き込み、防御貫通、無敵無視、HP0超大爆発攻撃を全ての範囲に射ち放つ災厄最強の魔法

である。そして彼女しか持たない二つの EXUB（エクストリームユニオンバースト）を彼女は扱うぞ。

一つは、自身の剣に宿らせた呪魔を増幅させ、その後相手に向かって『魔力全開放』した呪魔を解き放つ凶剣の究極奥義『エクスカリバー・モリガン』

もう一つは自身に宿る欲望の一つ、『独占力』を増幅させその増幅させた力を呪魔へと変換後、魔導書に宿らせその宿らせた力を相手に向けて放出させる、その形は全てを貫くヴォーパルの剣に似ており力を放出させた後、自身は一定時間魔導書使用不可となり代わりに片手剣の能力と魔導書の能力と融合させ片手剣でも魔法が使用可能になり剣の威力と『エクスカリバー・モリガン』の威力が5倍化する『カオス・キングダムクイーン』を使用するウ……

ヒヨウガ「ここまでで分からねえならもう見る意味がねえ……見る見ない以前にとつととオ、本編行けエっ!!」

………

ヒヨウガ「ーじゃあ、此奴が何故俺を知っていたかは知るまでもねエ……この俺を呼び出してこき使う為に洗脳しようとしたんだ。でも、出来なかったいや、そもそも俺含めヘルヘイム皆出来ねえんだよ……そんな洗脳する権限なんてもんは無効に出来ちまう

こつちの機嫌を損なう前にさつきと無言で、仲間連れて失せろ…理由は訊くな。一分かつたらさつきと失せろオ…ツ！」

それを聞いたユウキはヒヨウガの言う事に反論もせず仲間呼び掛ける…

ユウキ「…ユイ！それにレイとヒヨリも。彼奴の事は彼に任せて逃げるぞ…」

それに反応したユイ達。流石に心配だとユイ達は思つたのかヒヨウガに声を掛けようとするもそれをユウキは制止させる…

ユイ「え？ユウキ君？どうして？」

レイ「流石に、ここで逃げたら私達がここまで来た意味が無くなるぞ？ここは、彼の言う事に反して共闘を申し込むべきでは？」

ヒヨリ「そーだよ！彼一人じゃどうしようもー」

ユウキ「…それでも、『今』は共闘を申し込むべきタイミングではない気がする。…認めたくないけど、彼の言う通り僕達は弱い。弱すぎる。…だから、引くしかない…。それだけが今出来る最善の方法だと思ふよ…？」

その言葉にユイ達は『仕方ないな』と言わない限りの顔をした後、ユウキに応答する。ユイ「…そうだね。彼が言うのが事実だよね…。反論してゴメン。悔しいけどここは撤退しよう。皆もいいよね？」

レイ「うん。分かった。致し方無いよ。弱い事は今回の戦闘で分かったし次に生かす

とするよ。ユウキ、悪かった。」

ヒヨリ「アタシは認めたくないけど目の前にアタシ以上の力の持ち主がいるんじや仕方ないか……。ユウキさん。ゴメンね？」

ユイ達は心苦しさと悔しさを呟いた後、ユウキに謝る。その後ユイ達はヒヨリから先に来た道を戻り始めた。レイは周りを警戒しつつ先に行ったヒヨリを追って先へと向かう。

ユイも続き先へ行くもユウキを置いては行けない為か少し進んだ後、ユウキに声を掛けた：

ユイ「おーい！私はここで待っているから。君も急いでこつちに……！」

そうユイが叫んだ瞬間ユウキの後ろからヒヨウガが叫ぶように、そして話をし始める：

ヒヨウガ「オイっ！待て。ユウキ！ちよつと聞いてけ。俺の話を……。やはり素直だな。後ろは向きつつも俺の前に行った事は覚えてるんだなア……。？ハハアっ！……お前との話は飽きねえぜエ……。？ユウキ。……本題に入るぜエ……。先に行つておくがこの俺はお前エ達の味方でもねエし別に『今は』敵でもねエ……。だから、情けを掛ける必要性なんざねエんだ。だが、お前にこれだけは伝えたくてなア……。この先、何方にせよ『この世界線』は変わつちまう……。だが、お前達と言う存在はアこの先ぜつてえに必要になるだ

ろう…だがしかし、同時に俺等ギルドヘルヘイムの高き障壁にもなる…今のお前等じゃ
楽しめエ…だからア。生かしておいてやんよオ…だが、もし、『あつちの世界線』で相争
う場合は本気で殺しにかかるからこれだけは覚えて置けエ…。俺からの忠告は以上
だア…終わったからもう用済みだア。失せろ…」

と冷たく投げ捨てる様に言い放つ…その口ぶりからまた逢うだろうと言う意味も込
められている様だった。

ユウキは無言でうなずきその場を去る…それを後ろ向きでも気配が薄れていくのを
感じ取ったヒョウガ。

その後、気を取り直すかの様に覇瞳皇帝に向き直る…

ヒョウガ「…待たせたな。覇瞳（カイザー）。てめエが待つてくれるとは…珍しい事も
あるんだなア…なア？」

と覇瞳皇帝の事を略語で呼び始めた…すると覇瞳皇帝は何故か先程まで目を曇らせて
ていた覇瞳皇帝の顔が突然赤く染まった…それは怒った時に出る赤では無く心情に想
いが芽生えていた時に出て来る赤だった…

覇瞳皇帝「っ!?…し、しようがないじゃない…?ワタシは今、お前に傷付けられて攻
撃する位の余裕もないのよ…!?それに、私は覇瞳（カイザー）じゃなくて覇瞳皇帝（カ
イザーインサイト）！——ワザとかしら…?」

動揺を隠せていない覇瞳皇帝をみてヒヨウガは笑い始める…覇瞳皇帝（カイザーイン サイト）はそれを不快に思ったのか、怒って止める様に言う。

ヒヨウガ「くう…アはツハハアハハハっ!!クフフウ…!…やべえ…腹がア…ギャハハアアっ!!」

覇瞳皇帝「…っ!?!?な、何が可笑しいっ!!攻撃できないから上から侮辱する気?墮ちた者ねっ!!」

笑っていた事で覇瞳皇帝の顔が不機嫌になっていくのを見てヒヨウガはここらで潮時と思い笑っていた理由を話し始める…

ヒヨウガ「ヒイイ…フフツ…ふう…。いやいや、そんな事で笑った訳じゃないさア…お前にも物の分別と感情の揺らぎは有るんだなあってエなア…」

その事を言われ覇瞳皇帝は『ハツ!』と驚きの表情をして赤面ながら全力で否定する。

覇瞳皇帝「—っ!?!?な!?!?そんな訳無いじゃないっ!!お前と私とて一緒にしてもらわないで欲しいかしら!?!」

その返答にもヒヨウガは笑い、覇瞳皇帝はまたも戸惑いと赤面を露わにする…

ヒヨウガ「ギャハツアハハツ!!クフツ!あははっ!だからアよオ…お前の行動自体が否定してねエよオ…ギャハハツ!!」

覇瞳皇帝「なあっ!?!?何でよっ!どうしてっ!!とつくに捨てた筈の人想いの感情が…?」

くそっ!!」

覇瞳皇帝はその感情に苛立ちを込めて一人で話す。

それをみたヒヨウガは覇瞳皇帝にこんな質問を投げかける…

ヒヨウガ「…なあ。お前エ…どうしてそんなに人を拒む?…なぜ、神になぞならなきやいけねエ?—他にもっと別な事あるだろうじやねエのか?なあ?答えろよ」

その質問を投げ掛けると覇瞳皇帝は少し気難しい顔となる。

その後言葉は止まるも、決断した様で語り始めた…

覇瞳皇帝「…はあ。この事は誰にも理解されないから話すつもりなんてなかったのだけれど…まあ、ここまで追いつめられてしまえば話さないといけないわねえ…。じゃあ、私が何で神になりたいかを話しましょうか…。」

覇瞳皇帝は思い詰めた様子になる。しかし、覇瞳皇帝は一度話した事は破らない主義なのかまた口が動き始める…しかし、徐々に感情を表に出ない筈の覇瞳皇帝に悲しみと言う感情が表に出て来る…

覇瞳皇帝「…つ。私はね。あの世界が憎いの。いつその事あの世界を滅ぼしたい位私にはあの世界は大嫌いよ…特に愚かで馬鹿で下劣な人間共が。私が受けた仕打ち…貴方にはわかるかしら…?私はそのせいで、全てを壊された。人生を、仲間を、信頼を、感情を。拳句の果てには無責任に全部私に押し付けた。それ以降は誰も信用出来なく

なった。生きている価値すらなくなってしまった。それならば、その元凶となった奴もろともゲーム内に閉じ込めて、私の思うがままに出来る神になれば、これまでの人生が無駄じゃなくなる。その上、ここは願いが叶うとも言うゲームじゃない？ 猶更、これを利用して全ての奴を私の思うがままに動かせられるようになれば、ここまでで私を愚弄や侮辱した奴等にも復讐が出来る。だから私は神になりたいの。ならなきや生きる意味も資格もないのっ!! くう…ううう…だあから…私はここまで計画した…のお…ううグスウ…うう…」

話が終わると同時に覇瞳皇帝は泣き崩れてしまった…それもさっきまでの女王らしさを失い、代わりに一途な思いの故果ててしまい泣きじゃくる少女の様だった…

ヒヨウガはその姿を見た後そつと側に寄り添ったヒヨウガは覇瞳皇帝に語り掛ける様に慰める…

ヒヨウガ「…はア…?…はああ。…ちィ! この俺がやる役じゃねえだろうがア…くそつ! ……全くウ…せつかくのオ、『霸道』を貫く奴が堂々と泣きじゃくっているんじゃないよオ…七冠(セブンズクラウン)の女王だろ?…女王は女王らしくしてろよお…! 情けねえなア…」

覇瞳皇帝はその言葉に應える様に口を動かす…

覇瞳皇帝「グスウ…ズズツ…。別にいいじゃない…。ズウツ…。それに、わかつ

ているわよお：お前に言われなくてもおねえっ：！グズズツ！！」

その後ヒヨウガはさりげなく自身の過去を話し始める：

ヒヨウガ「：。はア：。：俺はお前と違い裕福でも貧乏でもない至って普通の生活を

している。いわば、普通の男子高校生だった。だがなア：ある一点を境に俺は周りから

遠ざかる存在になってしまったア：。それが、やってもいねエ事を押し付けられてし

まった。言わゆる冤罪って奴だなア：。それを機会に俺に虐めや暴力を受ける始末。

先生が助けてくれるウ：？そんな事やる馬鹿で真面な連中：一人もなかつたさア：そ

れもなア？クラスの奴もそうだが担任の奴も奴だった：相当なクズでねエ：俺が虐め

られてんのに見て見ぬ振りして逃げやがったア。それも上に報告もせずにあだ。

マジでブチ殺したい位憎かったア。クソ弱い自分を責めたさア：虐めた奴等をやった分だ

け1000億倍にして返したかったさア：。だが、現実には現実。その場を凌ぎながらあ

の日は生きていた。そしてこのゲームだ。願いが叶うたア黙っちゃいらねエ：迷わ

ず飛び込んだ。そして、この世界はあの世界よりもずっとマシだった。やればやるだけ

強くなるし、ゲームだから気晴らしにモンスターや他プレイヤーを殺しても大丈夫な世

界：それが今ここで生きている世界だ。だから、お前と俺は似ているんだ。寧ろお前の

願いを手助けしたい位にだ。だが、こうなってしまったんじや仕方ねエよオ：」

と長いながらも慰めと同時に自らの意思も示してくるヒヨウガだった。

覇瞳皇帝「…？私と、同じ？お前が、私と似ている？…。そうねえ…。だからお前と一緒に居ると調子が狂うのよね。気が合うからなのかしら…？ウフフ…」

ヒヨウガ「クククツ…。そうだ。その顔だア…その顔がお前らしさだア…。俺にまた見せてくれるとはなア…。だが、…。そろそろ時間な様だなア…？世界の再構築が始まって来ている頃だなア…。俺が巻き込まれる前にお前に頼む事がある。…聞いてくれるかア…？」

と、そういえばと言う感じで切り出した話。その話を覇瞳皇帝はヒヨウガにだけ初めて見せた雰囲気で親しげに聴いてくれた。

覇瞳皇帝「ヒヨウガから話？何かしら？貴方からの頼み事、私のできる範囲でなら訊いてあげるわよ？」

ヒヨウガは意外そうな表情を見せた後、ヒヨウガは自身の頼み事を言い始める…

ヒヨウガ「…。お前という奴はア…。クハハツ…：そうか。分かった。そんなじゃ、遠慮なく頼ませて貰うぜエ…？俺からの頼みは三つだア…。そんなじゃ、一つ目エ…：」

ヒヨウガの頼みを次々に聞いていく覇瞳皇帝…最後の頼みを聞いた所でヒヨウガは再構築に巻き込まれ始める…

ヒヨウガ「トオ…：丁度いいなア…？じゃあ、約束だけ？絶対に守る事オ…：大丈夫だア…：お前の願いは俺と同じイ…：いずれにせよ、俺の物になれば何もかもが上手く行くよう

になるから、あれが来るまではお前の政策に任せませエ…？」

と言ひ残しヒヨウガは消滅する…

覇瞳皇帝は、胸を押さえ少し目を瞑り考えた。その後ヒヨウガの言う『約束』を守る為行動をし始める…

覇瞳皇帝「…。ヒヨウガの奴…。フフツ…。本当にこういう感情になるのは久しぶり…。彼奴の約束もだけど、こればかりはヒヨウガの約束を最後まで守り切らないとね…？ こういう感情にしてくれて心まで開かせてくれたの…。ヒヨウガのせいなんだから…キチンと責任取って欲しいわよ。全く…」

覇瞳皇帝は、全ての『この世界を書き換える為の作業』に取り掛かった…ヒヨウガの約束は忘れずにその言われた事を先に終わらせてから世界を書き換え始める…。

しかしそれは、本来の筋書きとは全く違う方向に向いてしまっており、尚且つその方向は曲がり過ぎず『本来のシナリオの様に』動かせるようになっていた。

アメスはその事を見た途端急に血相を変えた。

それは、『彼奴』の終わり方を認めず、この私、『アメス』の終わり方をも認めない。それ故、全く『新しい終わり方』を望む集団がいる事が新たに判り、アメスはその集団の行動も視野に入れてユウキをサポートしていかなきゃいけないと強く思った瞬間であつた…

T
O

B
Y

C
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

2節 終幕 記憶を無くした少年と魔竜の少女達

2節 記憶を無くした少年と魔竜の少女達

僕は、夢を見ていた…ある大きな大決戦の夢。

そして、その時に現れた青年に助けられたのだ。…横暴だが、逃げる様に促してくれた事。

最後の最後にその青年と会話してその名前…ヒヨウガとヘルヘイムと言うギルドの存在…そしてこの僕がこの物語の鍵を握るとか何とか…

その夢がループし続けていた。

その後、急に夢の中なのに妙にリアルな明るさと温かさが肌を感じ取られ目を開ける…その目を開けると其処は周りに浅く流れる小川がある。その中央には大きな蓮の花が咲いている。その中央に居たのは女性だった。それも妖精で体のあらゆる部分が傷がついており、羽があつたであろうその部分は機械が剥げた様に茶色くなっている部分も見えた。僕が目覚めた事が判ると、笑顔で此方に歩み寄ってくる…

まるで母親の様に自分に優しく語り掛けてくる…

???"ん?…あら、起きちゃったのね?ユウキ。…取り敢えず、おはよう。…まだ貴方

は眠っててもいいのよ？こっちはまだ、作業に集中しなきゃだし：貴方と会話も真面に出来た物じゃないし：」

この時思った。なんで、僕の名前を知っているんだろう？そもそも、何処かで会った事があつただろうか：？と。

すると、目の前の女性は僕の顔を見て察したのか、落胆して僕に話を続けてきた。

「：。貴方は今、『あんた誰？』って顔になつていたわよね：？：はあ。：まあ、分かつては居たけど実際にやられるとやっぱり辛いわね：こっちはアンタの事をよく知っているからこそ、アンタに忘れられて気持ちが悪いのも道理よね：」

と独り言の様に話が進んでいく：その様子を見て僕はその女性に名前と何故僕の事を知っているのかを訊いたのだった：

ユウキ「えっと、すみませんが貴女の：その。名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

すると目の前の女性は名前と訊かれると少し戸惑い、考えるもすぐに名前を答えてくれた。

「ん？アタシの名前？：。：ん。そうね。『あの世界』での名前が本当の名前ではあるけど：も：。：ん、取り敢えず、『アメス』：とでも名乗っておくわ」

アメス「まあ、最近ではこの名前が通っているし：『この世界』では既にこの名前

通じているから問題ないわよ」

僕は、その言い回しに少し疑問を抱くも、束の間途中でアメスは何かあったように話を切り上げる。

アメス「……つと。……ユウキ。残念だけど、アンタとの話も今日は此処までみたいね。……こつちはまだ、『あの事』があつてから間もないし作業が色々も多いの。アンタと本当ならもつと話したいし、本望なら一緒に付いても行きたい。……けどアタシがこれじゃあアンタが行けてもアタシが行けないのよねえ……だから、アタシの代わりに案内人。……昔、アンタをサポートしたように……ね。……アンタの相棒の『私』の代理としてね。……歯痒いけど、実際に向かわせて貰ったからアンタの旅は保証するわよ。……心配しないで大丈夫。こつちはアタシが少しでも早く修復させるから、アンタはアンタの人生を楽しみなさい。アタシも修復が終わり次第すぐに向かうからさ。……それと最後にアンタに警告しておかなきゃいけない事が一つあるの」

さっきの心配な口調なアメスが一点、深刻そうな顔を見せるアメス。
その後、アメスはこれから向かうであろうユウキにある事を言う。

アメス「貴方はもしかしたら記憶にあるかもしれないけど、大決戦のあの時に現れた『竜の青年』……そして其処に所属している『仲間達』そいつら、もともとこの物語には存在しなかった、イレギュラーな存在なの。もつと大事な事を言うと、これから起きる物

語に更なるイレギュラー……私自身も把握しきれない数々の予想外があの方達によって起きると思うわ。だから、念のため心の中に留めておきなさい。何時、どんな時、どんな状況でもアンタもアンタの仲間になるであろうこれからの仲間にも、常に警戒はしておいて。アンタの事だから簡単に信用するとは思うけどね。それでもね、仲間だと思つて背中を預けた存在が敵になつた場合……この物語を紡ぐ為の鍵であるアンタが油断すれば、軽く死ぬかもしれないのだから。その位、イレギュラーな存在だけに把握しきれていないの……。無事に生きなさい。アタシからの願いはそれだけよ。……そろそろ、時間ね。またねっ♪ユウキ」

とアメスという女性は僕を心配してあの時に現れた青年の事を常に警戒して置くようにと強く念を押された後、目の前がシャットアウトされる。

そして再び僕の意識が闇へと落ちる前にあの青年と夢の中で最後に会話した時に言われた事を思い出した。

……………

ヒョウガ『—言つておくがこの俺はお前エ達の味方でもねエし別に『今は』敵でもねエ……だから、情けを掛ける必要性なんざねエんだ。』

ヒョウガ『—この先、何方にせよ『この世界線』は変わつちまう……だが、お前達という存在はアこの先ぜつてえに必要になるだろう……』

ヒヨウガ『―だがしかし、同時に俺等ギルドヘルヘイムの高き障壁にもなる…今のお前達じゃ楽しめぬエ…だからア。生かしておいてやんよオ…だが、もし『あつちの世界線』相争う場合は本気で『殺しにかかる』から―覚えとけエ…俺からの忠告だア…―』

……………

ヒヨウガは何かを知っていた。それも、まるで『この先に起こるであろう結末を知る』ような口ぶりだ。

ヒヨウガという人物は何を知っているのだろう…そう思いながらも闇に溶ける意識は受け入れていくユウキだった…

一方その頃…

……………

???
Side

ある草原地帯の一角。森林と草原の境にある自然に出来た温水…所謂、『天然温泉』で一人、体を流している少女がいた…

チャパン…チャパンツ…

髪はオレンジ色で長髪。目の色は澄んだ水色。美形で整っており服を脱いでいて王女様だと分かる位、礼儀正しさが滲み出ている。実際に王女らしく服は汚れない木の枝

に掛け、尚且つ折り目正しく綺麗に畳まされている。その近くには自身の下着を置いた本人にしか分らないであろう草むらに隠しており、その上には王女の象徴であるティアラと自分の護衛用の大剣と鎧が置いてあった：

「♪フツフン、フフン♪フフフン、フウ♪」

その少女は――

.....

――ドオンツ!!!

――どうもこんにちはあゝ♪私の名前は……ってえ、何ですか!?

あそこに見える、[???. Side] の表示。

絶対に私の事を判らせまいとする為の嫌がらせですかあつ!

ほおくと失礼しちやいますよお……全くもう……。

えくと、コホン。気を改めて……オイッスウー♪私の名前は……えつと、その、言おうとしましたんですが、有る事情がありましてですねえ……言えないんですよお……ごめんなさいっ!!でも、仮に私の名前を呼んでくれるとしたら……

――グウウウウウ……

――つっ!!……な、何で皆さんと挨拶をしている最中なのにお腹がなつちやうんですかあゝ

……あゝお腹減ったあ……

…えっ? 『それだ!』…?…何がですか?

…ペコリーヌ? ですか? 仮に呼ぶとしたら?

…えっ!? もしかして貴方天才なんですか?! 私の考えていた事を言い当てるなんて

…!? ヤバイですねっ☆惚れてもいいですか?! キスしてもいいですかっ☆♪

…えっへへ…ちよつと脱線しちゃいましたね…。そうですね…私の名前はペコリーヌと呼んで欲しいですね♪

ナレーション奪つて紹介してしまいましたが、いかがですか? 良かったですよ?

…このままだと、キリが悪く何時までも終わらないと思いますので、続きへと参りましょー! では、どうぞっ!

……………

??? 「よいしょ…つとお。これで、拭いたかな…」

サア…ササア…キュツ。

—その少女は、髪を流した後に持つて居た、持参タオルで体を拭いた後温水から上がりその近くに置いてあつた下着を履いた後、木の枝に掛けてあつた服を丁寧に着る。

??? 「…んー。ちよつと、だらしないかなあ…これで、…いいかな?」

…スサア……スウ…。

乱れた髪を直す為、簡素に手で後ろ髪を優しく掴みそのまま上へと振り上げる…その

後ろ髪はまるで羽が落ちていく様にゆっくりと垂れて行き、鎧を着てティアラを付ける頃には髪は整っており、水雫も一つも無くなっていた。

カシャ…カツ…キュツ…

??? 「後は、鎧を着て…つとと、髪は乱れない様にこれ、これをお…」

??? 「う…。……………」

しかし、ティアラを付けようとした直後、顔が曇っていき思い返す様に静止し、そのティアラを見つめ続けていたのである…

だが、そういう時間は一時にしか過ぎ無かった…

—キュイーン…!!

自身の身を護る為の剣を置いていた手頃な大岩…その大岩に意思が宿る…。

ゴゴゴゴゴゴ…!!

その大岩はその瞬間モンスターと化し地面から動き出す。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!

??? 「……………うう。—つ。—ううん。違う。絶対に違う…。何時か、何時か思い出して

くれる筈、でも、そう簡単に忘れるはずない。—なら、まだ私には何か足りない力があつた。私は王族としての力が足りないだけ…相応しくないし、力さえも足りないからあんな態度を取ったんだ。そう。絶対にそう。そうに決まっている。そうじゃなければ、あ

の思い出は……」

少女は、ティアラを平然と付けていた時代から大きく変わってしまった今のこの状況までを思い返している様でその動き出しに気付かない……

：ゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!

??? 「……何?—えっ?えっ、えっ?!」

—ズゴォーンツ!!!

??? 「……きゃあつ?!?!」

気付かない少女を裏目に埋まった地面から思い切り体を起こすモンスター。少女はギリギリまで思い出に浸っていたが、大岩が体を起こした瞬間、少女は異変に気が咄咄にその衝撃を躲す。も——

—ドンツ!! ステンツ!!

その衝撃は逃れる事は無理だったらしく、自分は少し吹き飛び、モンスターと距離は少し離れるも、自身を守る剣はその起き上がる衝撃で、自分が吹っ飛ばされた位置よりも少し遠い場所へと綺麗に回転しながら飛んでいき、地面へと唐突する頃には真っ直ぐと剣が落ちて行きそのまま刃先から地面へと深く突き刺さった……。

少女は咄咄過ぎて、頭から打つ事だけは避ける様に考えていたせいで後ろには気が回っておらず、衝撃により思いっ切り尻餅を着く……その着いた時の衝撃は頭まで到達し

鈍痛が頭に響く…

???「イっててえ…。さ、流石に油断し過ぎて、いましたね。警戒して無かった私が、一番悔しいです…。うう…。頭があ…。痛い…。」

驚きと思い出に浸り過ぎて頭が回らないせいで周りが上手く認識出来ておらず、更には鈍痛により更に更に物音が聞こえ辛い始末…。そんな彼女の状態はお構いなくその大岩のモンスターは、その後後ろへと振り向く…。動けない彼女に目標を定め、走り込むように近づき始める—

ゴドソツッ！ゴドソツッ！ゴドソツッ！ゴドソツッ！！

その後、自身の攻撃範囲に入った所で、岩で出来た拳を彼女へと振り落とす…！

モンスター「グゴゴゴゴオツッ！！」

—ヒュウウウウウツ！！

拳が振り落とされる7秒前、痛がり、唸る彼女の見る方向がいきなり暗くなる—何かと思いを上を、暗くなった方向を見て衝撃と焦りを見せ、剣を探す—

???「うう…。ん？あれ？つてえ!?ヤバいつつ!?あええつつ!?えーと!?…ああつ!!
剣、剣はつあ!?!」

思い出すのも束の間、迫る拳がある為今探す余裕もなく躲す方へと専念する、何気に行った行動が彼女の求める剣の近くへと回避した…

ドゴオーンツ!!

??? 「アブなっ!?…っ!…もう、いきなり女の子を襲撃するなんてマナーがなっ居ま
せんねっ!!」

逃げる方向に剣が突き刺さっているのが見えた彼女は其処へ勢いよく走り込む…そ
して—

??? 「これ、使うの、嫌ですし、デメリットが半端ないですから、使いたく無いですが、
命には代えられませんし、仕方ありませんっ!!…行きますよおっ!!…—やああっ!!!」

ザキーンっ!!!

モンスター「ギイイイッ!?…グゴゴゴ、ゴオ…」

ドゴンツ!ゴゴドゴンツ!…コトン、カタン…コツコツツ…

彼女の放つ大剣による横薙ぎの斬撃は大岩のモンスターへとヒットする…その体は
見事に横に真っ二つに割れそのモンスターはただの岩と化し絶命する…

危険が去った事を意味する無音と静かな風が辺りを制する…

少女は危険が去りホッと一息…

??? 「ふう…これで、少し休め—」

ギユウウウウ…

その静かな風と無音な草原に突然可愛いお腹の音が流れる…

??? 「…うう…はあああー…お腹ペコペコですう…」

彼女がこうしていたほぼ同時刻…時は遡り彼女が天然温泉でゆっくりしていた頃。

その天然温泉の場所とは真逆…森林生い茂る大森林と樹海と呼ばれる永久迷路、別名『自動生成地獄の天然迷宮』その到達点、視界限られる大森林の中央、開けた場所に高くそびえたつ古めき塔…其処でもこの物語に大きく関わる人物達の話が進んでいたのだった…

・・・・・・・・・・・・・・・・

ヒヨウガ・Side

暗闇の中、意識やらが闇へと落ちている最中、徐々に誰かの声が此方に語り掛けている事に気付く…

* 「お兄ちゃん…まだ起きないかなあ…」

と聞きなれた元気で高い声が心配そうに声のトーンを落として誰かに尋ねている…

* 「大丈夫ですよ。トウカ。お兄様は、ヒヨウガお兄様は、いずれ目を覚まします。私が保証します」

と冷静で落ち着いた声で自分が知っている家族の末妹の名前をいい☒トウカ☒を宥める様に声を語り掛ける…

*「そうだね。キョウカちゃんの言う通り。待とう？トウカちゃん。私のお兄ちゃんだし、私と息が合う位の仲であって兄妹で双子。私は一番大好きで自慢が出来る…。私の半身…ゲーム最強の兄妹だから。絶対に、必ず起きる筈だよ。…そうだよね…？お兄ちゃん…」

と、自身の中で最も大切で有り自身の一生で掛替えの無いパートナーである。まさに半身と言って良い程離れた事は一度もない双子…ヒョウカの声がした…ヒョウカは信賴しているのか、こうしている間もまるで弟の面倒を見る様に膝枕をして頭を優しく撫でている…そんな感触があった。

流石に、寝ている訳にも行かないのでいい加減起きる事にする。

でも、何故か皆の声の調子がまるで兄じゃないかもと疑っているというか、前より女の子達の雰囲気があったような…それ以前に何か体が重く怠い…？

そんな先程思った疑問を解決する為目を開ける…勿論、ある漫画とか…？あるアニメみたいに目をバツと開いて驚かせるのは一瞬面白そうだし、試してみようかと思ったが、先程言ったように女の子達の雰囲気判っている為か、何故か無性に悲しくなってしまう…すると自然に思い付いた方法が一つあり、演技でも何でもいいから一回唸り上げた後に、目をゆっくりと開けるという方法。普段の俺ならそんな事しない筈なのに、その方法を思い付いた瞬間から既に実行している自分が、無意識にいたのであった。

ヒヨウガ「ーく、…うう…うっ…」

俺はそのまま目をゆっくりと開ける…

その声を聴いた家族達は驚き、膝枕していたヒヨウカはいきなり俺が声を発した事と目覚めた余りの慌てぶりに俺まで、慌ててしまっていた。

ヒヨウカ「へっ!?!…お兄ちゃ…ん?…え、ええーっ!?!」

トウカは目が覚めた事に気付き大声を発して喜びと驚きを露わにしていた。

トウカ「目が覚めたんだっ!?!」

キヨウカは俺を見て何時もの毒舌でやけに冷たい目でヒヨウカとヒヨウガを見つめていた…

キヨウカ「…いいですねえー…ヒヨウガお兄様はー」

俺はヒヨウカの膝の上で寝ていた為、ヒヨウカが驚きの余りに立ち上がった瞬間自身の体はその反動で嫌でも立ち上がってしまった。

ヒヨウガ「ちよっ!?!、ちよちよ…っ!?!待って待って。いきなり揺らされたら、困るってえ…っ!?!…おひやあっ!?!」

…も、流石に突然すぎた為、すぐにヒヨウカの膝の上へと引き寄せられるように頭が落ちていく…

…ムキユツ!

—の筈がその頭が落ちた場所が胸であり—

ヒヨウカ「きやあつ!!…え、えへへ…う…えーとお…?ヒヨウガ、お兄ちゃん?…ほらっ
?起きて…?…その…お兄ちゃん?が寝て居るその場所…私の…胸…」

その事を聴いた俺は慌ててその場所から離れ、謝った。

ヒヨウガ「えっ!…ああ…ゴメンツ!!ヒヨウカ。今、離れるから!」

ヒヨウカ「…でも、お兄ちゃんになら…私は、平気なだけなあ…」

何故か、ヒヨウカの顔が赤くなり此方へ顔を急に逸らしてボソツと言った。

ヒヨウガ「ん?何か言った?」

俺は、その言った言葉が気になって聞くのだがその質問をした瞬間慌てふためく。

ヒヨウカ「う、ううんっ!?!?何にも言っていないよおっ!?!うん」

やはり何か気になる事をボソツと言った事は確實だが今問う事ではないので、また後で問い詰めるとうしよう。

…それはそうとして、ここはどこだ?見慣れない場所だが…?

そう俺が思うとその顔を見るにヒヨウカはその返答に答えた。

ヒヨウカ「ここは樹海の様です。ヒヨウガお兄様。どうやら、あの決戦以降、私達へルヘイムはかなりの間眠らされていたようです。現にその塔は昔、ソルの塔として聳え立っており、その塔こそあの覇瞳皇帝との決戦の舞台だったらしいですが…見事に葛

が絡まっており更には至る所に苔さえも生えております：即ち今の世界はあの時の世界と大分異なっている部分も多いのでは？と推測されます」

とキヨウカは自身の自己解釈と今の現状を組み合わせ自分なりの答えを編み出したようだ：それでもわかりやすい答えに素直に俺は褒める

ヒヨウガ「いや、推測でも、予測でも、お前の持つ理解力と創造力には本当に助けられてきたからね？だから、改めて言うよ。ありがとう。そして凄い纏め方で本当に判りやすかったよ」

キヨウカはその言葉に否定の意を込めて毒舌を吐くが俺等がこのゲームをプレイする時のみある魔竜の尻尾は正直な様で、まるで犬や猫の様に尻尾を振り振りしていた。

「…っ!?そ、そんな訳無いじゃないですか：何時もの通りにやっただけです。はい」

…なんか照れ隠ししている事が判りやすい一面、感覚もあるらしい。特に女性は油断するとその尻尾だけで力が入らなくなる位の快感が体全体を襲うらしく、尻尾を触らせようともさせないらしい：

そう俺が思っ居るのも束の間、先程説明した尻尾は無論俺にも付いている訳で：キヨウカは、俺がそう思っ居る事が気に食わない様で俺の尻尾へと瞬間的に回り込み一言：

キヨウカ「憤怒。お兄様。今、私の事を『可愛くて分かりやすい尻尾だなく』と思

ましたね? いいでしょう。お兄様にも体感させてあげます。『女の子の快感を極限にまで』ね?』

しかし、俺は女の子じゃない。男だ。更に尻尾は男の子の場合は敏感では無く鈍感。痛みすら感じず、敵を薙ぎ払う際によく使用する。だから、そんなの平気だと身構え、俺も一言言おうとしたのだが—!?

ヒヨウガ「ふくん。そう。じゃあ、やってみたら? 多分、ボクには何も聞かなア—」
—ヒュン!

ヒヨウガ「—ひゃああうううっ?!?!」

突然、自身の体が経験したことのない感覚と力が抜ける感じで、以前の声では無く自分の口から可愛いらしい女の子の声で悲鳴が上がる…

しかし、キョウカはお構いなしに尻尾を触りまくる…

サラサラ…ヒュン…ヒュウン…

ヒヨウガ「なあい…いお、ひゃあんっ?!?!…あ、やあ—ひえんっ?!?らあかあらやあ…ひえあんっ?!?はあ、りゃあんっ?!?」

次々と尻尾を触られ可愛い声を上げていく俺。

その内、その触りがあるせいで力が抜け、動けない位に麻痺してしまい。さらに其処に触っている元凶にすら手が出せなかった。また触られる度に徐々に力が入らなく

なつていき、何時の間にか地面に女の子座りしている俺がいるのだがそんな事を気にする余裕は無くキョウカに唯々触られていき俺は可愛く気持ち良さそうな悲鳴が辺りに木魂すのだった：

ヒョウガ「はあ、はあ、はうう…はあ…も、もう…わ、わかつた、からあ…やめ、やめてよお…きゆううう…」

暫くしてキョウカは飽きたのか又は懲りたと思つたのか知らないが、突如止める。その後、キョウカは突然こんな事を話し出す。

キョウカ「…わかりました。少なくとも貴女はお兄様で有るようですね…？その初々しい感じは元々男だったような感じであり、感じた事のない快感に戸惑われている様子…。可愛らしいですね」

…キョウカのそのギリギリアダルトになつてしまふ行為は止めてくれよ！…小説見る人が困るだろうがよオ…。全く。

その後キョウカはこんな事も話し出す…それは、この物語が始まるきっかけでもあつたのであつた…

キョウカ「…それはさて置いて、お兄様？ここら周辺で何かと騒ぎがあるようすけど…どうします？向かいますか？」

その言葉の返答には迷わず答える。

ヒヨウガ「…向かうよ。取り敢えず。困っている人がいるのなら助けるのは当然だよ。まあ、前の世界程では無いけどね…行こうか？」

俺がその話をし、皆に問うと…

キヨウカ「お兄様が良ければ何処までも、付いていきますよ」

ヒヨウカ「ヒヨウガ君が行く所は絶対に付いていくから大丈夫」

トウカ「お兄ちゃんの為なら何処までも、辛くても…いや、嫌いな物以外なら何処までも行きますよ！」

トウカの返答だけおかしかった気もするが…まあ、いいや。急がないと助けられなくなるからなっ!!ここでのたばっては時間の無駄だ！

ヒヨウガ「よしっ！それじゃ、急いで向かうよ！」

三人「うんっ!!」

ヘルヘイムがついに動き出し、丁度腹ペコ少女がゴーレムを倒しお腹空いたと嘆いていた…その3分後…

とある野原の中央に位置し、其処に寝ていたかつて世界を救おうとして最後の最期で失敗してしまった少年が寝ており、その近くで静かに微笑み少年の為のご飯を作っている少女がいた…

その少女はこれからのパートナーになるであろう少女でもあった…

??? 「…アメス様の託宣の通りの場所ですね。という事は、貴方がワタクシの主様でいらつしやるのですね。って、眠っていらつしやるのに何を訊いているのでしょうか。…。悩んでいても仕方ありません。我が主様の為にご飯をお焚きしましょう。…喜んでくれますよね…?主様…」

ユウキ・Side

自分の意識が暗転した後暫くたった…

すると、少しずつだが直ぐ近くから少女の声が聞こえてくる…

それも、いい匂いさえもきいていた…

??? 「…はじめっ、ちよろちよろ…なかばつぱあっ♪…—赤子泣いても…ふたとるなっ♪…」

その声に導かれるままに目を開けると…

??? 「…あっ!…フフ…お目覚めになられたのですね…?主様。えっと…お体の方は大丈夫でしょうか?」

と、目を開けると早々銀髪で髪が短く、目は赤い。耳は少々小さく尖っていて頭には草花のティアラを付けた少女が此方をみて微笑んだ。

僕は何時まで寝ている訳にはいかないと思つた為、その場で起きる

ガサツ！ササアサア…

??? 「おはようございます。主様。…失礼ながらお名前をお伺いしても宜しいでしょうか?…」

と急に申し訳なさそうに訊いてくる少女。

僕は黙って、聞かれた事に対してこう答えた。

ユウキ 「ユウキだよ。…えっと、君は?」

そう僕は訊くと少女は少し驚き戸惑うもその質問に答えた。

??? 「…?!?…意外ですね…。主様がこんな質問に悩む事無くお答えになられるなどは…記憶喪失では無さそうなのでしょうか?…?…?…じゃあ、アメス様の託宣で言われた事と今のこの状況は一体…?…?…おおっと…余りにも主様の印象にビックリして私の紹介が疎かになってしまいうでした。えーと、やはり、貴方様は私の主様で間違いは無いです。…コホン。お初にお目に掛かります…。私の名前はコツコロと申します」

コツコロと自分の名前を名乗る目の前の少女は僕の為に用意したであろうご飯を握りながら口を動かす。

コツコロ 「私のお役目は、主様のお側にずっと…いえ、一生お仕える事です。おはようからお休みまで、ゆりかごから棺桶まで。主様の生活やら色々な事全てを全力でサ

ポートさせていただく為にここに居て参じた『主様だけのガイド役』です」

自分の使命の事を僕に話すのと同時に手の動きが止まるその後手で握っていたご飯を僕の方に渡した後、口を動かす：

コツコロ「…主様。目覚めたばかりでお腹が空いておいででしょうか？これを…。主様が起きた時の為に焚いていたご飯です。…どうぞ。お食べ下さいまし」

そのご飯はコツコロのという少女により三角に握られており、その一部分には黒く薄い何かが巻かされていた。

僕の顔を見て思い出したかの様に口を動かします。

コツコロ「…？ああ、先程アメス様の託宣のお告げを忘れておりました。何たる不覚…。主様は記憶喪失でございましたね…。大丈夫です。…主様。その黒い物は毒ではありません故食べても支障などないです。どうぞお食べになって下さいまし」

そう促すコツコロにつられ僕はその三角のご飯を口にする：

ユウキ「あむ。…。…。美味しいよ。コツコロ。君の作ったご飯。上手いね。…ユイと互角かそれ以上か…にしても美味しかったよ」

そう。コツコロの炊いたご飯はユイと同じ感じで美味しくかったのだ。料理の才能があるのか…または、僕を主様と呼ぶからなのか分からないけど…

そう呟くと、コツコロは感謝を言うもそれと同時に質問もしてくる

コッコロ「お褒めに預かり誠に光栄です。主様。所で疑問なのですが…そのユイ…様とは？一体、誰で御座いますしょう…？」

ユウキ「え？…確か、僕の側に居てくれて何時もサポートをしてくれた…回復魔導士だったかなあ…ともかくうろ覚えだけど、ユイって子は友達だった気がするよ」

『ユイ』って言葉を耳にする何故か胸が痛くなるけど、思い出そうとすると靄がかかったような気持ちになってどうしても続けられなくなるのだ。

コッコロはその僕の言葉に戸惑いつつも、否定はせずただ微笑んだ後、僕の話に乗って来てくれた

コッコロ「…。左様でございますか。…フフ。やはり、主様は、お友達が多くなりそうな予感がありますね…。主様の性格と違い、他の男性方を比べても明らかに主様の方がより人に好かれやすくそれも、女の子にはやたらと頼りにされそうですね。その、『ユイ』って呼ばれる方も『主様』を信頼してくれたからこそ、今こうして『主様』の記憶の隅に印象深い人が残ってくれた訳です。…これから出会うだろう女の子達も、勿論私も、貴方様の記憶に印象深く残る様に誠心誠意尽くしますのでこれからよろしくお願いいいたします。主様」

コッコロは僕の話に同情し僕に対しての理論と結論を彼女なりに考えだしてくれたようだ。しかし最後の話の意図が読み取れず僕は頭にクエスチョンマークがついてい

たのだった。その時近くで見知った音が聞こえてくる。

ギユウウウウウウウウ……

その音の後に僕ではない誰かの女の子の音が隣から唸る様に喋り掛けてくる……

???「……お腹、空いたあ……お腹、があ……ペコペコお、ですう……誰、かあ……飯、をお……」

すると、その声に反応したコツコロは声で分かるはずなのに勝手に僕が話したと勘違いし僕の方を見た後、分かっていますと言っているかのようにののように予め作っていたであろうおにぎりの入った包みを開き、僕に話しかけた。

コツコロ「……主様。大丈夫です。お腹がまだ空いていきましょう。貴方様の為に私、たくさん作ってきましたので好きなだけ食べて下さいませ」

そう言い、僕の方に包みを寄せた後、「主様はまだまだ食べられると思い私も一袋作っていたんですよ。今、バックから探し出して主様に差し上げます故、少々お待ちください」と笑顔で言った。……僕は未だに何も言っていないが、そんなことは気にしない様でコツコロは、バックから予め作っていたもう一つの包みを探し出す為、僕に一度背を向ける。その時だった、コツコロでもない。僕でもすらない、先程唸っていただろう声の主と共に、先程と同じ場所から親しみやすい声と共に登場したのは王女様風の鎧とティアラと身に着けた橙色の長髪にアホ毛が目立つ、可愛く優しそうな女の子だった

：

「??? 「良いんですかっ!?!ほんとにつ?!感謝しますっ!!有難う御座いますっ!!本当に有難うございます!!!お陰で死なずに済みます!!!では、頂きますっ!!!」

その女の子はコツコロの言葉が自分自らに向けて言われたと勘違いしたようで、此方に感謝をしつつコツコロの作ったであろう、15個から25個の手頃なおにぎりを瞬く間に彼女は次から次へと口にへと運びそのままペロリ。

「??? 「はむっ!あむっ!はむあん!!はぐおむあむっ!!!はんあむっ♪んう♪あぐあむあむっ!おむあむおぐっ!!あむあむうっ!!はあく♪生き返るう♪やっぱりご飯は命のエネルギー♪」

そのおにぎり一個を手にかけてまるまる一個完食するまでの時間。なんと僅か、3秒。

なので、30秒しないうちに風呂敷内のおにぎり全てを平らげてしまった。

コツコロはそんな事を知らずにバックを漁り、二つ目の風呂敷を此方へと手渡そうと振り向き、やっと気付く。人数が増えている事に。：その後、コツコロは、増えた女の子に話しかける。

コツコロ「…?…あれ?お一人増えていらっしやいますね…?それも、私がお作りになった主様のご飯が全てあの方に食べられてしまったみたいですね?…。その、貴女様

は一体？宜しければお名前―」

しかし、コッコロが名前を訊こうとするもその女の子は全く聞いておらず二つ目の風呂敷に手を掛けて半分。その女の子は満足そうに此方に感謝を述べてくる…

??? 「―はんつ！あんおむつ!!あむあむつ!!おむつ！あむつ!!ふううく♪んうはあああく♪生き返ったあく♪本当にありがとうございまして!!名前も見ず知らずのワタシにこんなにご飯を恵んでくれるなんてえ…!!一生恩に着ます!!」

コッコロ「いや、別に貴女様へ上げようと思つた訳では無いですが…喜んでいらつしやるのであれば何よりです。しかし、どうしてもこんな所にお一人でいらつしやるのでしよう？宜しければ、理由を―」

??? 「きやああつ!?誰か助けてえっ!!」

とその少女に訊こうとするも、またも突発的に耳に入ってくるのは女の子の悲鳴。そのせいでまたもコッコロの質問が遮られた…しかし、この声は、僕が知っている声だった…。何処かで聞いた覚えが…?

そう思つて居るとようやく視界内に見えてきた。みえたのはピンクの短髪で花のヘッドドレス、左手に片手杖、言う所の回復と攻撃両用のロッドを持ち必死に後ろから迫る魔物二匹に第二陣で有ろう魔物三体から逃げている少女が見えるのだった…

先程、急に現れた少女は此方に急に謝つてきたのだつた…

??? 「…あの魔物…。多分ワタシを狙ってきたのだと思います。見ず知らずの方。本当にすみません。後はワタシはあれをひきつけ倒しますので彼方は何処かに逃げて下さい。ワタシはワタシが起こした責任を取りますからっ！ではっ！」

と言いつちあそこに見える魔物に向かって突撃していく…

コツコロはその言葉に対して僕に質問してくる…

コツコロ 「随分とご自由な方なのですね…まあ、いいでしょう。主様。いかがいたしましょうか？私はどちらでも構いませんが主様は戦うか逃げるか…？何方に致しましょう？」

僕に唐突な質問を投げかけてくるコツコロ…だけど、何故だか僕は、怖いけど、そんな事を何時までもしていたら終わる筈の世界が終わらない…そんな不思議な言葉が頭に浮かんだと思っただけじゃ、口が思いもしない言葉を口にしたのだった…

ユウキ 「逃げているだけじゃ、悲劇は終わらない。逃げてばかりじゃ、アイツに終止符が討てない…なら、いつそのこと、僕はアイツを、そして、皆を救う為に戦うよ。コツコロ。いこうっ！」

コツコロ 「…っ!…。はい。分かりました。主様。参りましょう。私達皆で、あの方を援護いたしましょう！」

—タツタタタタタツタツ!!

僕達は先程向かった少女を援護する為に、走り出す…すると、突然その横からの生い茂った草木から音がした後、僕達二人に向けて話しかけてくる…

—ササツササアササツ!!

??? 「その戦い、僕達も参加してもいいかなあ?」

その声に一度立ち止まると、茂みの向こうから四人。女の子が歩いてくる…

その後僕達に、挨拶をしてくる。

??? 「初めまして。今はその時ではないので名前は言えませんが、私達は貴方達の味方です。安心して下さい」

??? 「そうそう! 私達は別の仕事があつたんだけど、その際に偶然その仕事に関わる重要人の残す痕跡が都合よく手に入れそうだからついでに手伝うって話。名前は後々話すから後でね?」

??? 「いきなりですみませんが、貴方達の助太刀にご協力させて頂く事は出来ますか? 無理そうなら、直に立ち去りますが…?」

個別で挨拶をしてきた女の子だったが今は一人でも多い方が心強い。なので、

ユウキ「うん。君達の誘い。断る理由なんてないよ。協力してくれ!」

四人「了解!、任せて!、承知。承りました!」

それぞれが反応を称し、あそこに居る女の子達に助太刀をする…

タタタツタタツ!!!

??? 「―よしっ! いっきますよお♪ーん?」

コツコロ「その戦い。私達にも手伝わせてください。乗り掛かった舟です。私共も手を貸しましょう。えーと…?ん、戦闘で名前が無いのは不便なので、仮に貴女様を、お腹ペコペコの『ペコリーヌ』様…と今はお呼びしますね…?」

その女の子は今にも戦いだしそうな所で、僕達はギリギリ間に合い、参加する事が出来た。コツコロはその子の特徴を捉えて『ペコリーヌ』とあだ名で呼ぶ事になる。そのあだ名が嬉しかったのか笑顔で此方に喜びの声を上げてきた。

ペコリーヌ「おやあ? その『ペコリーヌ』って私の事ですかあ? 可愛いあだ名をつけられちゃいましたあ♪ヤバイですねっ☆♪」

その『ヤバイですねっ☆』に反応したのか、茂みで出会った彼女はふと自身の名明かすそれに続く様に次々と名前を話し始めた…

??? 「そうだね。確かに君の言う『戦闘で名前が無い』のはあからさまに連携がとりづらいしねえ…。ここで明かすつもりは無かったけど個々での縁はこれからも続くだろうし名乗っておくよ。ボクの名前はヒョウガだよ。これからそう呼んでくれれば嬉しいかな?」

??? 「おに―姉様。名案でした。確かにそうです。では、紹介。キョウカ。それが私の

名前です。これから宜しくです」

??? 「じゃあ、隠さない方がよかったじゃん！トウカの名前はトウカって言うよ。お兄ちゃん達っ♪これから宜しくね!!」

??? 「私からも。私の名前はヒヨウカ。おにーお姉ちゃんと似ている姿だけど使う武器が違うし言葉使いも違うから呼び止めた場合基本最初の自分称を何といつているかで判断してほしいかなあゝなんて」

しかし、紹介の時間は余り持たなかった…

敵がいよいよピンクの髪の女の子を追い詰めていたのだった…それを見たコッコロは僕等に伝えてきた…

コッコロ「皆様、どうやら長話をしている余裕はないようです。あのお方がピンチな様です」

それに反応した僕等五人はそれぞれ役割分担をヒヨウカが決め僕からの指示を待っていた。

ヒヨウカ「そうだね。じゃ、ヒヨウカはボクの隣で前衛を」

ヒヨウカ「了解！」

ヒヨウカ「トウカは遠距離で僕等をサポートして！」

トウカ「ふっふっふっ♪お姉ちゃんの言うがままにね！」

ヒヨウガ「キヨウカは、後衛く中衛で戦況の分析後、的確に指示を飛ばして！そして、僕達の援護と強化も頼むよ！」

キヨウカ「承知致しました」

ヒヨウガ「後は君次第だよ。僕達は準備完了だから何時戦つてもOKだよ！」

僕はヒヨウガの指示飛ばしが終わり、準備完了と言うまで、待つていたけど案の定、準備完了と言つてくれた。なので：

ユウキ「よし！じゃ、戦闘開始だっ!!」

皆「おーっ!!」

その掛け声と共に皆はそれぞれの担当された場所へと向かう：トウカは僕の近くで援護。キヨウカは、僕よりも遠いもまだみえる距離へと向かう：コツコロも同じくキヨウカと同じ場所で戦うらしい。ペコリーヌとヒヨウカにヒヨウガは敵が目前の最前衛で戦つていた。

そして、僕の後ろでピンクの髪の女の子が此方に気付いて話しかけてきた：

???「えつと…その、助けてくれてありがと…っ!？」

僕の顔を見た瞬間ピンクの髪の女の子は驚いたような顔を数秒間見せた後此方に歩み寄つた。そして、何故か涙目になりながら抱き着いて来た…その理由も話してくる：

???「う、嘘…っ!？き、君つて、ユウ、キ、君。だよね…？ううん、この私が忘れる筈

が無いもん!!ユウキ君っ!!ううっ…こ、怖かったんだよ…ううっ!私の頭がおかしくなったんじゃないかって思っていたんだよっ!!ユウキ君の事…私が知っている友人すら知らないって言うんだもんっ!!ほんととお…もう…あえて…本当に…本当に良かったよおーっ!!

と号泣もしてしまいうピンクの髪の毛の女の子だった。その後直にピンクの髪の毛の子は紹介も兼ねて皆で窮地を脱する事を決して今度こそ戦うのだった…

???'「…ううう…えっへへ…は、恥ずかしい所…見せちゃったね…らしくないなあ、私ねえ、私も一緒に戦うよ。…あ、そうだった。ゴメンね?まだ私の名前を言っただよ。たよね?…遅れたけど、私の名前はユイって言います。回復魔法も使える魔導士だよ。君達の足は引つ張らない様にするから、これから宜しくね?」

ユウキ「うん。宜しく。ユイ。…よし、今度こそ…戦闘開始だっ!!!」

— ? 戦闘開始? —

— ? Battle Start? —

Battle wave 1

味方陣営

0

前衛 ペコリーヌ L v. 3、ヒヨウカ L v. 1000、ヒヨウガ L v. 150

中衛 コツコロ L v. 2、キョウカ L v. 800

後衛 ユイ L v. 2、トウカ L v. 800

敵陣営

前衛 レッドマシュー L v. 1、レッドウルフ L v. 1

中衛 無

後衛 無

ターン1

ペコリーヌの攻撃!

ペコリーヌ「やあっ!」

レッドマシューに

200ダメージ!

コツコロのスキル『トライスラッシュ』!!

コツコロ「行きますっ!」

レッドウルフに三回!

45・31・59…合計135ダメージ!

コッコロは一瞬で中衛陣地へと戻った:

レッドマシユーの攻撃!

レッドマシユー「ギャヴウツ!!」

その攻撃はヒョウガに防がれた。更にカウンター!

ギインツ!

ヒョウガ「おっそいよおーっ!!ホラアツ!!」

ドゴオオンツ!!!

レッドマシユーに800000ダメージ!!

レッドマシユーはダウンした。

レッドマシユー「ギユウウ…」

レッドウルフの攻撃!

レッドウルフ「グアアアツ!!」

その攻撃はヒョウガによって防がれた。そしてカウンターを浴びせる。

キインツ!!

ヒョウカ「読みが甘すぎるよっ!せやああっ!!」

グシャアアンツ!!!

レッドウルフに550000ダメージ!!

レッドウルフはダウンした。

レッドウルフ「グオオ…」

敵陣営全滅!

キョウカ「この調子です。次の勝利も掴み取りますよ。」

I wave Win!

Battle wave. 2

Boss Battle wave

味方陣営

waveと同じ

敵陣営

前衛・ゴブリンガード Lv. 5

中衛・レッドウルフ Lv. 7

後衛・ハイメタルガードマン・R Lv30

僕達が倒した敵二体より格別のオーラ丸出しのこの軍を指揮しているボスらしき

ゴレムが一体後ろに控えているのが見えた…前衛後衛と共に此方に話が回ってくる…

ペコリーヌ「おおっと…これは凄くヤバそうな敵さんのご登場ですね…うーんちよつと勝ち目がないかもお…」

ヒヨウガ「いや、ボク達の『今の力じゃ』無理だとは思うけど彼の…ユウキだけが持つ力、その『プリンセスナイト』の力さえあればこんな雑魚敵なんて蹴散らせる筈だよ」
ヒヨウカ「ヒヨウガ君の言う通りだよ皆。ユウキに力を貸してもらって私達に眠っている強大な力を引き出して貰わないとね？」

キョウカ「そうです。こんな雑魚は私達皆に指一本触れる事すら不可能な事を思い知らせてあげますよ…！」

コッコロ「主様。皆もそう言っていますし、主様のお力で私達の限界突破した自身オリジナルの技。一個人最強の必殺技である『ユニオンバースト』略してUBを発動させましょう！」

トウカ「やり方は簡単だよお兄ちゃん。私達が、『UBを出せる時はその合図として声を掛けさせてもらう』から、その時にお兄ちゃんがその人『個人の力を最大限に引き出してくれれば』後は勝手に体が動くらしいからさ」

ユイ「勝手にえ…それはそれで怖いよ…でも、それで君達が無事になるのならなん

たつていいよ」

ユウキ「。。。わかった。お前達の事信じているからな！。。。よしっ！みんなっ！行くぞっ！！」

? Boss Battle?

・ボス情報

・ハイメタルガードマン・ R Lv30

・HP・ 9000000

・特性・ ハイメタルボディ

・効果

ダメージ軽減50%

・敵・ UB 『血讐』

・相手に自身の減ったHP分の30%を自身の攻撃力に追加したダメージを前衛と中衛の全員に与える。

敵特性

・相手からのUBのダメージは+50%追加で攻撃を受ける事となる。

・状態異常付与はUBの際に付与される場合は確定で付与される。

・毒、出血は常時無効

ハイメタルガードマン。 R L v. 30

HP. 900000

ハイメタルガードマン。 R

「コノ、メイレイヲジャマスル、テキハ、タトエブガイシヤデモ、イツパンジン、ダトシテモ、ヒミツシツタヤツ、トシテ、ミナ、ゴロシ、ダツ!!」

ターンー

ヒヨウガ「舐められたものだねえ…じゃ、君の次のターンは無いと思った方がいいよお…跡形苦も無く造物は造物らしく、地に戻ってしまええつ!!!」

ヒヨウガのUB発動!!

ヒヨウガ「ボクを舐めた事を後悔しながら逝けっ!—はああっ!!吹っ飛べっ!スーパ—ノヴァア!!」

ドゴオオン!!!

ハイメタルガードマン。 Rに100000ダメージ!!

トウカのUB発動!!

トウカ「ふっふっふっ♪ここで、私の必殺が発動だよ!!—血となり肉塊となっ

え〜っ！クリムゾン・スプラッシュユウ!!」

シャキ ジャキ ザアッキーンツ!!

100000ダメージ!!

ペコリーヌ「私の全力!!見せちゃいますよおーっ!!みじん切りです!プリンセスストライクツ!!」

シャツ!シャキツ!シャキーン!!

ハイメタルガードマン Rに50000ダメージ!!

キョウカのUB発動!!

キョウカ「全く。私と貴様の己が無力をしれっ!…全てを貫くヴォーパルの幻影…。顕現。ヴォーパルの剣…。全てを蒸発させよっ!!…ヴォーパルう…ストライクウツ!!!」

ドゴオオオーカーンツ!!

ハイメタルガードマン Rに150000ダメージ!!

ハイメタルガードマン RのUB発動!!

ハイメタルガードマン R「ダメージシークエンス…解析…。分析完了。…破損部位、及び、ダメージ値…追加…。アタックシークエンスへ…移行。…目ノマエのシヨウヘキト、エネミーへ、『ペインレーザー』発射…ツ!充填開始…ツ!5. 4…『サン』ツテイウトオモツタカ…?…シネツ!!」

うん。ユウキ君の期待に応えなきゃ…だね…皆を守る！癒しの魔法よ…皆の思いに応えて！オールヒーリング!!」

全員はユイのUBにより30000HP回復した！

コツコロのUB発動!!

コツコロ「皆様！一気に畳みかけましょう!!…行きます!!光のご加護を!!」

全員の行動速度と攻撃が20%上がった！

更にコツコロのHPが12300回復した！

ヒヨウガ「…いい？ペコ！一緒にUB発動させて終わらせよう!!」

ペコリーヌ「えっへへえっヒヨウガちゃんにも言われちゃいました♪でも、いいで

しょう！貴女の提案。乗ってあげます!!」

ペコリーヌとヒヨウガの合体SUB発動!!

ペコリーヌ「フフツ!!私の全力全開のフルパワー!!」

ヒヨウガ「ボクとしても、これ以上の争いは望まないけど…やむを得ない…。壊すつ

もりで行くからっ!!」

ペコリーヌ・ヒヨウガ「プリンセス・ヴァリアント!!」

ザキンツ！ジャキンツ!!キューインツ!!…ドットゴォーンツ!!

ペコリーヌ「平和の為なら、幾らでも戦います!」

ヒョウガ「まあまあ、だったけど、相手にもならなかったねえ！」

ハイメタルガードマン・Rに600000ダメージっ！

ハイメタルガードマン・Rはダウンした!!

他モンスターはリーダーが倒れた事により全軍撤退した…！

ハイメタルガードマン・R

「グオ…ギイ…ガガガッ！システムエラー発生…！戦闘継続は…不可、能…」

ドカーンッ!!

ハイメタルガードマン・Rは、その場で自爆した。

損害は無く皆無事に、此方へと戻り勝利の一言をそれぞれ言う…

ペコリーヌ「大した事なかったですね♪」

コッコロ「大したって事は無くも無いですがギリギリだったのは確かです」

ユイ「皆を見ててヒヤヒヤしたよお…」

ヒョウガ「この位、僕に掛ければ簡単な事だよ」

ヒョウカ「そんな訳ないでしょっ！もう…油断したから負けそうになったけど、ユ

ウキ君が居てくれたから逆転出来たんだからさ！」

トウカ「そうそう！ユウキ君凄ーいっ♪えへっ♪お礼にもつとんでんであげ

ね？」

キョウカ「…トウカ。生憎言いにくいですが、それをやる方が間違っている気がしま
すよ？普通なら男性がー」

トウカ「よしよーしっ！良いプレイだったよっ！！有難うっ♪」

キョウカ「……………」。はあ…。それを受け入れている騎士様如くユウキ様は：
まあ、馬鹿で良かったと今、思いますよ。フフ…」

Win

この戦いで色々な経験をした。

短い間だが色んな事があった。

しかし、この戦いからもう既に物語のギアが動き始めたのは、今はまだ誰も知らない
のだった…

ある森の中で…

???「チー！後、もう少しだったのにつ！何なのよっ！あのペコリーヌだっけ？それに、
あの四人の女の子達！チートすぎんじゃないのっ！？全くもうっ！あの方に何て報告す
れば…。いや、まだ失敗したわけじゃない！次の手があるわ…！精々頑張って抗いな

さいな…?ペコリーヌ達…!

ある家で…

ヒヨイツ!!

??? 「ひやああああっ?!?」

??? 「スズメお姉ちゃんっ?!」

カシヤリリン…!

??? 「また、スズメお姉ちゃんが、ドジ踏んだー」

あるメイドは皿を割った事に対して物凄くへこみ物凄くパニックになっていた…

スズメ「ああわわわっ?!?これで、失敗何回目なんでしょう…?お皿割るのもこれで、1

5268回目…ドジ踏むのが今日含めて累計854210回目…はあ…何時私は、ドジ

踏まないメイドになるんでしょう…」

??? 「無理…なんじゃ、無いかな…?」

??? 「それが、スズメお姉ちゃんの、持ち味だとも思うし、スズメお姉ちゃんにしか

良いポイントでもあると私は思うなあー」

スズメ「それ、ほめているんですか?!?からかっているんですか?!?」

??? · ??? 「どっちも…。どっちもー」

スズメ 「はあ…全く二人共は…」

???・??? 「はははははあははは…」

ある農場内で…

?????? 「お姉ちゃん。ありがとう。この絵本をプレゼントしてくれて」

?????? 「えへへええ♪それほどでも。でも、しおりんが喜んでくれたならお姉ちゃんも嬉しいよお」

「お姉ちゃん。今日、時間ある？」

「あるよ〜?どしたの〜?」

「だったら、えっと、お店に付き合ってくれないかなあ？」

「うん。いいよ!しおりんの為だもん!いくらでも付き合うよ!」

「ほんとに?ありがとう。お姉ちゃん」

あるギルド内で…

?????? 「今日の動物苑(カオン)も、平和さー。何だか、平和過ぎて、つまらんさー」

「おいおい、平和つて。まだ、アタシらのギルド活動は終わっても居ないんだぞ?」

「まあ、まあ、平和つていいもんどすえ?むずかしゆう考えんとも、今、この時が

一番平和やと、わいは思うんよ。なんぎやわあ…」

??? 「はあ、私もそうは思うけど、そうはいつてられないのだよ。近頃、シャドウという正体不明の魔物が出没するらしいからね？巡回はする必要があると私は思うよ」

??? 「なんなら、全員で巡回すればいいさー。そうしたほうが大勢で賑やかになって楽しいさあ。なんくるないさー♪…カスミもそうは思わん？」

??? 「…ま、まあ、全員…とはいかないけど、巡回する際に多くて3・4人は強い人がいた方が何かあった時に安心なのは確かだね？」

??? 「おうよっ！なら、いつその事、全員でいかねえか？それで今日の巡回は終わりでメシにしようぜえっ♪」

??? 「なんぎやわあ…。わいは構わんよ。全員で外出は、何て久しゅうぶりやろか…」

??? 「おい、マホ姉さん…いくら何でもそれは…」

??? 「ああく楽しみやわあく♪ほな、いきましょか？皆はん」

??? 「……………」

??? 「OK♪私も楽しみ♪なんくるないさ〜♪」

??? 「君もそう思うか？マコトさん」

マコト 「そういうなら、カスミもかあ…？」

マコト・カスミ 「はあああ……………」

コツコロ「主様」

ユウキ「何かな？」

コツコロ「さあ、いきましよう。これから始まる。私共の紡ぐ。…物語を。…ここから」

ユウキ「…わかった。…いこう！コツコロ！」

コツコロ「はいっ！主様」

次回予告…!!

中央都市、ランドソル。

其処で出会う数多くの少女達!!

しかし、その裏で動く二つの勢力!!

???「ボク達、ギルド。…ヘルヘイム。このヘルヘイムの正式なギルド名は、『極秘隠密暗殺ギルド・ヘルヘイム』だよ。君達の命。もらい受ける…」

???「聞いて名乗るのも、いやらしい限りですが聞かせてあげますホトトギス!!私達、ギルドは『秘密結社ギルド・ラビリンズ』です!!」

この二つの組織の目的は…?—果たしてその結末とは…!?

次回、プリンセスコネクト!! Re Dive:

『秘密結社と隠密ギルドの対立と記憶の鍵を握る者』

君ともう一度繋がる…誰も知らない物語…